

富田林市埋蔵文化財調査報告書22

平成4年度

富田林市内遺跡群発掘調査概要

1993. 3

富田林市教育委員会

は　じ　め　に

富田林市内における遺跡数も近年の開発等による事前調査や試掘調査によって新たな発見をみ、160カ所を越えるものとなりました。本市は、市内の中心を流れる石川とともに育まれてきたと言っても過言ではありません。石川によって形成された平坦地には、旧石器時代から近世に至る先人の痕跡が残されています。

本書は、平成4年度国庫補助事業として、市内に所在する遺跡の調査成果を報告するものです。

最後になりましたが、調査にあたり参加、ご協力を賜りました方々に厚く感謝申し上げます。

平成5年3月

富田林市教育委員会

教育長 西尾典次

例　　言

1. 本書は、富田林市教育委員会が平成4年度に、国庫および府費の補助を受け、実施した緊急調査発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課、中辻亘・今西淳・田川友美を担当者とし、平成4年7月9日に着手し、平成5年3月31日に終了した。
3. 本書の執筆は、各々文末に記すものがあたった。本書の編集は、中辻が行い、製図については、田川が行い、錦織遺跡については、栗田薰女史の援助を得た。

発掘調査参加者

〈調　　査　員〉　楠木理恵・中野篤史・廣野知子

〈調査補助員〉　川合和代・須安敏雄・頃宮貴美恵・長尾圭・中塚正敏

〈作　　業　員〉　岩井節子・岡上巴和・小田信代・坂本竹男・田中山次・
土井正光・中川正博・成山貞逸・西澤寿子・原田亮子・
藤丸祐子・前田壯志・前野美智子・矢野早苗・山本節子

本文目次

はじめに

例　　言

I	平成4年度調査概要	1
II	甲田遺跡	2
	KD92-1	2
	KD92-2	2
	KD92-3	5
	KD92-4	5
	KD92-5	6
	まとめ	6
III	甲田南遺跡	7
	KDS92-1	7
	1.層序	9
	2.遺構	9
	3.遺物	13
	4.まとめ	21
IV	錦織遺跡	22
	NK92	22
	1.層序	22
	2.遺構	24
	3.遺物	30
	4.まとめ	43

挿図目次

挿図1	KD92-1平面・断面図	2
挿図2	甲田遺跡調査地位置図	3
挿図3	KD92-2平面・断面図	4
挿図4	KD92-3～5平面図	5
挿図5	甲田南遺跡調査位置図	8
挿図6	第1トレンチ平面図	10
挿図7	第2トレンチ平面図	11
挿図8	住居址1出土遺物	15
挿図9	住居址1・包含層出土石器	17
挿図10	土壤1・ピット8・9出土土器	19
挿図11	包含層出土遺物	20
挿図12	錦織遺跡調査地位置図	23
挿図13	NK92平面図	25・26
挿図14	遺構出土遺物	33
挿図15	遺構出土遺物	37
挿図16	包含層出土遺物	39
挿図17	その他の遺物	41

表 目 次

表1	発掘届出件数	1
表2	発掘調査一覧表	1
表3	KD 9 2 - 3 ピット一覧表	6
表4	KD 9 2 - 4 ピット一覧表	6
表5	KD 9 2 - 5 ピット一覧表	6
表6	第1トレンチ 土壌・ピット一覧表	12
表7	第2トレンチ土壌・ピット一覧表	13
表8	各遺構出土遺物一覧表	14
表9	遺構一覧表	27~29

図 版 目 次

図版1	(上) KD 9 2 - 1 調査区全景 南から (下) KD 9 2 - 1 溝1西断面 東から
図版2	(上) KD 9 2 - 2 調査区全景 北東から (下) KD 9 2 - 3 調査区全景 北から
図版3	(上) KD 9 2 - 4 調査区全景 北から (下) KD 9 2 - 5 調査区全景 北から
図版4	(上) KD 9 2 - 2 土壌1出土土器 (下) KD 9 2 - 2 土壌1出土瓦
図版5	(上) KDS 9 2 - 1 第1トレンチ全景 南から (下) KDS 9 2 - 1 第1トレンチ ピット9遺物出土状況 北から
図版6	(上) KDS 9 2 - 1 住居址1全景 南から (下) KDS 9 2 - 1 住居址1内柱穴1 東から
図版7	(上) KDS 9 2 - 1 第2トレンチ東半部全景 東から (下) KDS 9 2 - 1 第2トレンチ西半部全景 東から
図版8	(上) KDS 9 2 - 1 土壌1出土土器 (下) KDS 9 2 - 1 住居址1・包含層出土遺物
図版9	(上) NK 9 2 調査区全景 南西から (下) NK 9 2 調査区全景 北東から
図版10	(上) NK 9 2 トレンチ全景 東から (下) NK 9 2 ピット1遺物出土状況 東から
図版11	(上) NK 9 2 ピット3遺物出土状況 東から (下) NK 9 2 ピット4遺物出土状況 西から
図版12	(上) NK 9 2 ピット4遺物出土状況 西から (下) NK 9 2 ピット2遺物出土状況 東から
図版13	(上) NK 9 2 包含層遺物出土状況 西から (下) NK 9 2 塙出土状況 東から
図版14	NK 9 2 出土遺物(瓦器塊・皿)
図版15	NK 9 2 出土遺物(土師器皿A・B)
図版16	(上) NK 9 2 ピット1出土土器(土師器皿A) (下) NK 9 2 ピット3出土土器(土師器皿A)
図版17	(上) NK 9 2 ピット4出土土器(土師器皿A) (下) NK 9 2 出土遺物(羽釜・直刃削器・土鍤・須恵器甕・壺)

I 平成4年度調査概要

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
発掘	5	4	3	3	4	8	12	14	6	2	3	3	67
立会	15	6	12	13	10	7	8	5	15	4	12	4	111
慎重工事	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
発見届	0	1	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	5
計	20	11	16	16	14	15	21	21	21	7	15	7	184

表1 発掘届出件数(平成5年3月15日まで)

No.	調査期間	遺跡名	位置	申請者	規模 (m ²)	用途	備考
1	4. 7. 9~7. 10	甲田遺跡	甲田456-2	山本 謙三	72.93	個人住宅	本書掲載
2	4. 8. 21~9. 7	甲田南遺跡	甲田51外3筆	疋田 緑三	3,722	倉庫	本書掲載
3	4. 9. 24~10. 5	甲田遺跡	甲田456-2の一部	小泉 節	70.88	個人住宅	本書掲載
4	4. 10. 27~12. 25	錦織遺跡	錦織415-2	藤本 多美	323.9	個人住宅	本書掲載
5	4. 11. 5~11. 6	甲田遺跡	甲田456-7	笠本 一太	65.41	個人住宅	本書掲載
6	4. 12. 10	西板持遺跡	西板持町3丁目686-1	北所弥太郎	516.4	個人住宅	浄化層部分1×1.5mを機械掘削 遺構・遺物なし
7	4. 12. 18~12. 25	錦織遺跡	錦織640-7	管野 義治	323.1	個人住宅	浄化層部分1.5×2mを人力掘削 奈良時代の土壙を検出
8	5. 1. 6~1. 7	甲田遺跡	甲田456-6	森田 孝志	59.11	個人住宅	本書掲載
9	5. 1. 8~1. 11	甲田遺跡	甲田456-7	天野 薫美	60.11	個人住宅	本書掲載
10	5. 2. 1~2. 3	西板持遺跡	西板持町7丁目791外2筆	北辻 弘	450.9	個人住宅	浄化層部分2×2mを人力掘削 ピット・土壤を検出。遺物なし
11	5. 2. 18~2. 19	甲田南遺跡	甲田59-4	古川 真一	195.9	個人住宅	浄化層部分1.5×2mを人力掘削 溝・ピットを検出

表2 発掘調査一覧表

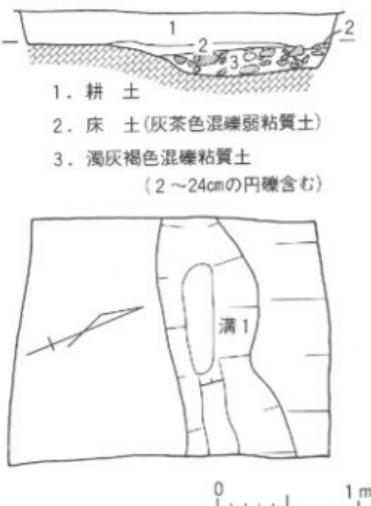
II 甲田遺跡

甲田遺跡は、市域のはば中心に位置し、市内中央を流れる石川西岸の低位及び中位段丘上に広がっている。昭和46（1971）年から51（1976）年にかけて行った本市教育委員会の分布調査によって確認された遺跡である。その後の発掘調査によって、しだいに内容が明らかになってきており、弥生時代から中世に至る遺跡と考えられている。（中辻）

KD92-1

調査地：富田林市甲田456-2

調査面積： $5\text{m}^2 / 72.93\text{m}^2$



挿図1 K D 92-1平面・断面図

調査地は中位段丘の東縁にあって、近鉄長

野線川西駅の北東方、旧国道170号線の東に位置する甲田集落の北部にあたり、養楽寺の北に接している。現況は水田である。

個人住宅建設に伴うもので、調査対象を浄化槽部分とし、 $2 \times 2.5\text{m}$ の範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

地表面から20cmの厚さで耕土があり、直下が地山である。一部に灰茶色弱粘質土の床土が薄くみられる。

調査区の北半部で濁灰褐色粘質土に $2 \sim 24\text{cm}$ の円疊を含む埋土をもつ溝を検出した。この溝は南北方向に延びると思われ、長さ180cm分を検出したのみで、南肩は確認したものの、北肩は調査区外のため、幅は不明である。深さは約15cmを測る。南肩に近いところではさらに深く落ち込んでおり、最も深いところでは約18cmの落差がある。

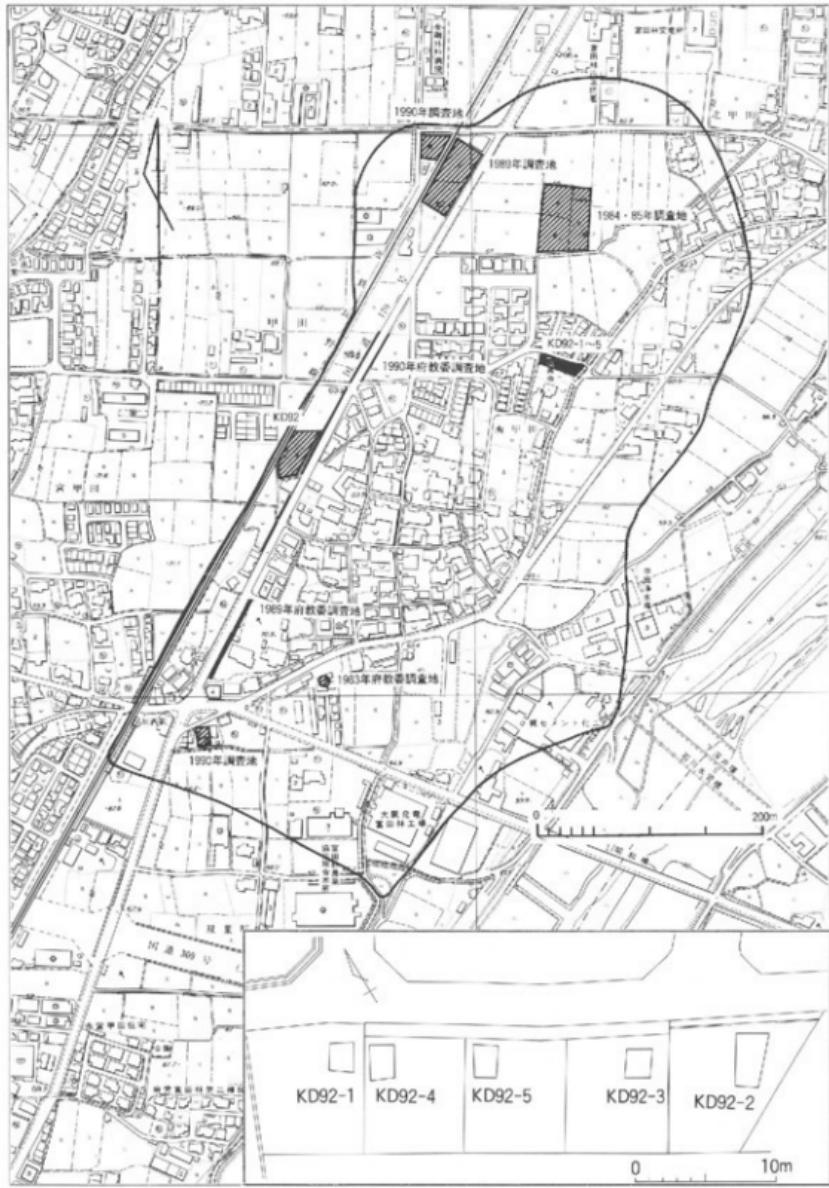
溝からは、羽釜・瓦器・丸瓦・平瓦が出土している。

（中辻）

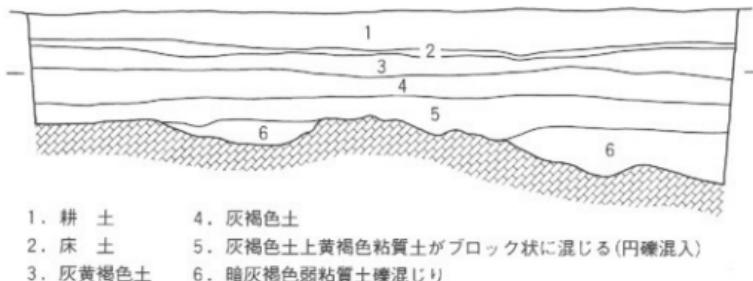
KD92-2

調査地：富田林市甲田456-2の一部

調査面積： $8\text{m}^2 / 70.88\text{m}^2$



挿図2 甲田遺跡調査位置図



挿図3 KD 92-2 平面・断面図

調査区1 (KD 92-1) のある水田の一角に位置する。

個人住宅建設に伴うもので、駐車場及び浄化槽部分を調査対象とし、 2×4 mの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

地表面から65cmで地山が現れる。層序は、上から耕土 (20cm)、床土 (5cm)、灰黄褐色土 (10cm)、灰褐色土 (20cm)、黄灰色土がブロック状に混じる灰褐色土 (10cm) の順である。造構には溝と土壤がある。溝は東西方向のもので、調査区の北端で長さ240cm分を検出した。東では分岐しており、約20cmの間隔で平行に延びる。南の溝は深く、深さ20cm、幅約20cmを測り、土壤に流れ込む格好になっている。溝からは瓦器・平瓦・丸瓦が出土している。土壤は溝の南から東に曲がり、底には礫混じりの暗灰褐色弱粘質土の埋土をもつ落ち込みがみられる。南側での深さは約40cmあり、落ち込みは最も深いところで約25cmある。土壤からは須恵器・土師質の小皿・瓦器・瓦質の羽釜、甕、罋鉢が出土している。

(今西)

KD 92-3

調査地：富田林市甲田456-7

調査面積：4m²/65.41m²

調査区2（KD 92-2）の西側に位置する。

個人住宅建設に伴うもので、浄化槽部分を調査対象とし、2×2mの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

層序は、耕土（20cm）、床土（5cm）、灰褐色土（4～8cm）の順である。第3層については、調査区の北と東にのみ認められる。これは地形が北東に傾斜している関係と思われる。

検出した遺構は、ピット5である。それぞれのピットについては表3を参照されたい。

（今西）

KD 92-4

調査地：富田林市甲田456-6

調査面積：4.5m²/59.11m²

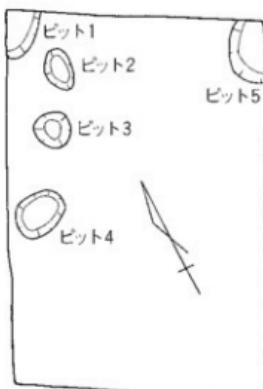
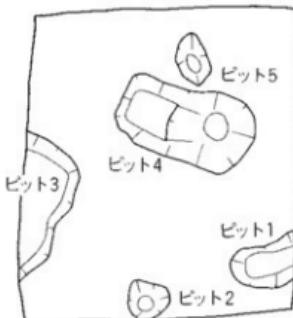
調査区1（KD 92-1）の東側に位置する。

個人住宅建設に伴うもので、浄化槽部分を調査対象とし、1.8×2.5mの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

厚さ20cmの耕土直下、黄褐色砂礫の地山である。

検出した遺構は、ピット5である。それぞれのピットについては表4を参照されたい。

（今西）



挿図4 KD 92-3・4・5平面図

KD92-5

調査地：富田林市甲田456-7

調査面積：4m²/60.11m²

調査区4（KD92-4）の西側に位置する。

個人住宅建設に伴うもので、浄化槽部分を調査対象とし、2×2mの範囲を人力掘削により発掘調査を実施した。

層序は、耕土（20cm）、床土（3cm）、灰褐色土（5cm）の順である。

検出した遺構は溝2、ピット5である。溝1は南北方向に延びるもので、長さ90cm分を検出した。調査区の南西端にあって、幅は最も広いところで25cm、深さは5cmを測る。埋土は灰褐色土である。ピットについては表5を参照されたい。

遺物については、認められなかった。

(今西)

まとめ

今回の調査地は、甲田遺跡の北東部、中位段丘の東縁にあたる。遺構の内容はいずれも中世、室町期のもので、瓦を出土することから、寺院などの建物があったと推測される。

調査地のすぐ南には「養楽寺」があり、この寺の寺域が広かったことを思わせる。甲田遺跡における過去の調査をみると、現在の甲田集落が立地する旧国道170号線から以東の中位段丘面では中世の遺構が確認されている。遺跡の北端では、古墳時代と思われる遺構も検出されており、

甲田（向田）の地名が「日本書紀」に記され、渡来人が住

番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	遺物
ピット1	不整形	(0.45)×0.32	0.185	潤灰褐色混土	土師器
2	不整形	0.29×0.32	0.07	潤灰褐色混土	
3	不整形	(1.09)×(0.4)	0.115	灰褐色土	
4	不整形	0.95×0.55	0.145	潤灰褐色混土	
5	不整形	0.38×0.23	0.045	潤灰褐色混土	

表3 KD92-3ピット一覧表

番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	遺物
ピット1	不整形	(0.35)×(0.25)	0.025	灰褐色土	
2	椭円形	0.31×(0.2)	0.05	灰褐色土	
3	円形	0.26×0.26	0.08	灰褐色土	
4	楕丸方形	0.38×0.28	0.045	灰褐色土	
5	不整形	(0.45)×(0.26)	0.045	灰褐色土	

表4 KD92-4ピット一覧表

番号	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	遺物
ピット1	不整形	(0.3)×0.3	0.05	灰褐色土	
2	不整形	0.24×0.2	0.05	灰褐色土	
3	椭円形	0.2×0.16	0.035	灰褐色土	
4	椭円形	0.18×0.13	0.05	灰褐色土	
5	椭円形	0.3×0.2	0.05	灰褐色土	

表5 KD92-5ピット一覧表

んだ地であると言わわれていることと関連して興味深い。また、遺跡東半の低位段丘面では、奈良時代の遺物が出土している。

今回の調査で、遺跡の西半部において、比較的広範囲に中世遺構が存在することが明らかとなつたことの意義は大きい。

(中辻)

III 甲田南遺跡

甲田南遺跡は、昭和50(1975)年に遺跡のはば中央を東西に走る国道309号線（大阪千早線）予定地内において、都市下水路築造工事の際に発見されました。その後、昭和55～59（1980～1984）年にかけて国道309号線築造工事に伴う本格的な発掘調査が大阪府教育委員会によって実施されてきました。その結果、縄文時代から中世にかけての遺構が検出され、なかでも弥生時代中期の竪穴住居址群が広範囲にわたって存在することが判明しました。また、昭和63（1988）年に富田林市教育委員会によって行った調査では、旧国道170号線より西側に奈良時代の遺構がひろがることや平成4（1992）年の市営住宅建て替え工事に伴う調査では国道309号線より南側には古墳時代から中世の遺構がひろがることが判明しました。

この遺跡周辺の地形は、石川と羽曳野丘陵との間に中位・低位の段丘が、それぞれ4～7mの段丘崖を作つて連なつており、甲田南遺跡は、石川に接する低位段丘上に位置しています。

(田川)

K D S 9 2 - 1

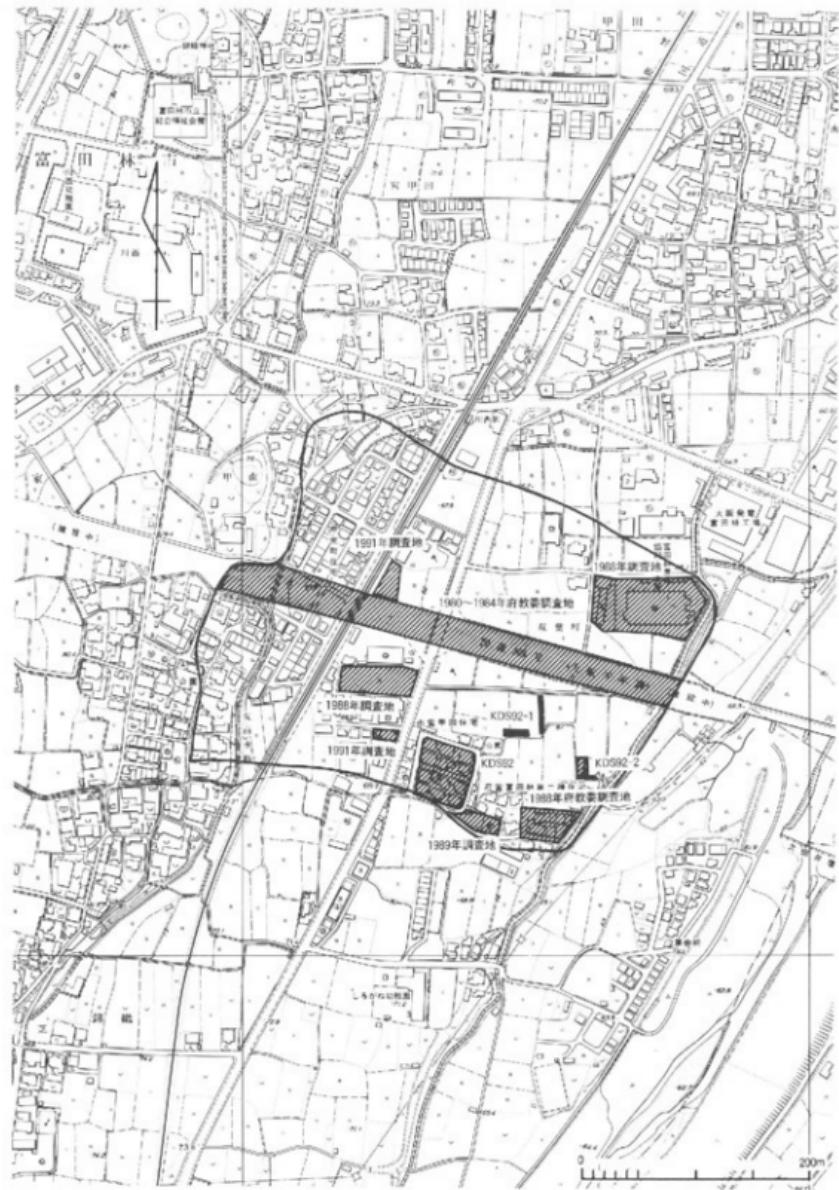
調査地：富田林市甲田51外3筆

調査面積：42.81m² / 3,722m²

今回の調査地は、甲田南遺跡の西端に位置している。平成4年5月12日に、埋蔵文化財発掘届出書が富田林市教育委員会社会教育課に提出され、倉庫の建設が計画されており、協議の結果、塹壁部分と浄化槽部分について発掘調査を実施することとなつた。

調査は、調査区の東側に南北約35m、東西約1.8mの第1トレント、南側に南北約4m、東西約27mの第2トレントを設定し、平成4年8月1日から9月7日まで現地調査を行つた。

(田川)



挿図5 甲田南遺跡調査位置図

1. 層序

第1トレンチは、上から順に耕土（約20cm）、床土（約6cm）、濁黄灰色土（約4cm）、黄褐色弱粘質土（約6cm）、マンガンを含む灰褐色土（約10cm）がほぼ水平に堆積する。

第2トレンチの東側は、第1トレンチと同様の堆積状況を示すが、西側約1/3では、現在の水田面が1段高くなっている。上から順に耕土（約20cm）、床土（約5cm）、黄褐色土と灰黄色土がブロック状に混じる褐灰色土（約16cm）、灰褐色土（約10cm）、濁黄灰色土（約12cm）、黄褐色弱粘質土（約4cm）、褐灰色混疊土（約10cm）が堆積する。第3・4層は、水田化されたときに客土されたものと推定される。
(田川)

2. 遺構

第1トレンチ

住居址1、溝4、土壙2、ピット15を検出した。

住居址

竪穴住居址1棟を検出した。

住居址1

平面形が円形の住居最大幅7.62m分を検出した。南側で壁溝、長さ1.31m、幅36cmを検出した。床面では、2カ所柱穴を確認した。柱穴1、大きさ1×0.96m、深さ0.63mの不整形なものである。柱穴2、大きさ0.52×0.18m分を検出し、大半が調査区外にあるため深さ・形状は不明である。柱間は、2.6mを測る。

溝

溝を4条検出した。

溝1

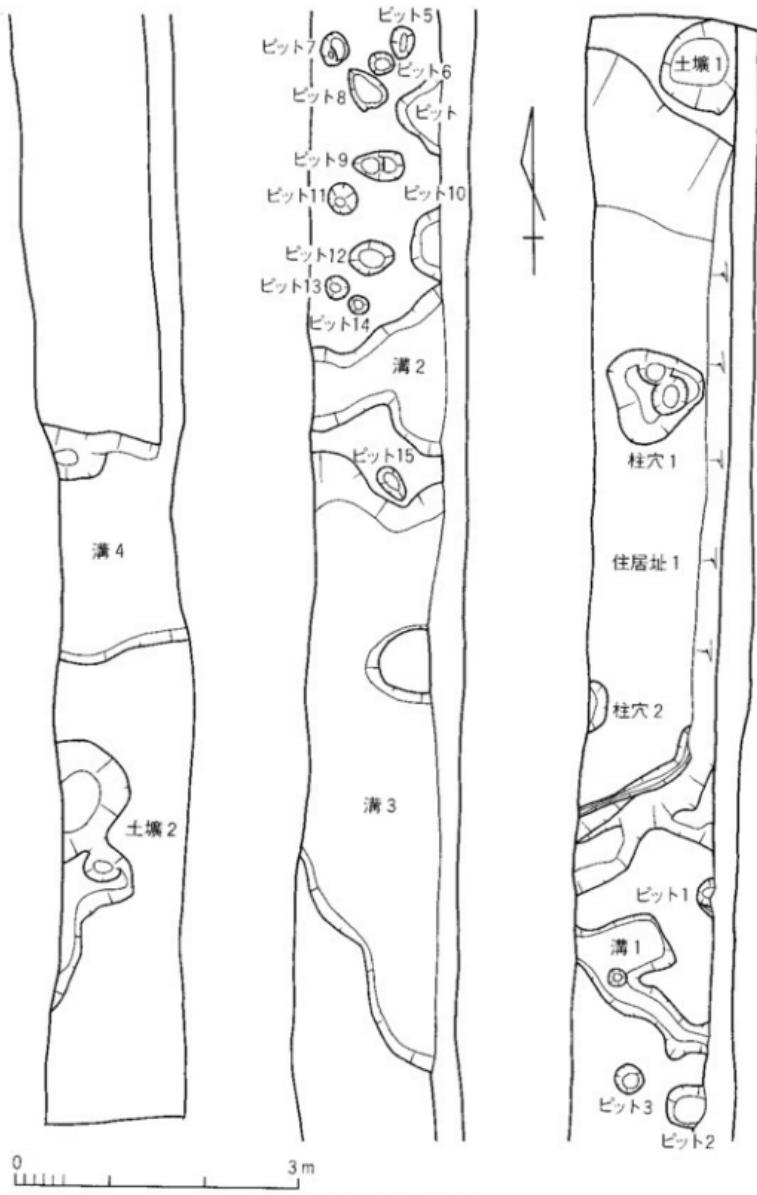
北西から南東に流れる溝である。長さ1.77m分を検出した。幅は1.06m、深さは0.26mを測る。埋土は濁灰褐色土である。

溝2

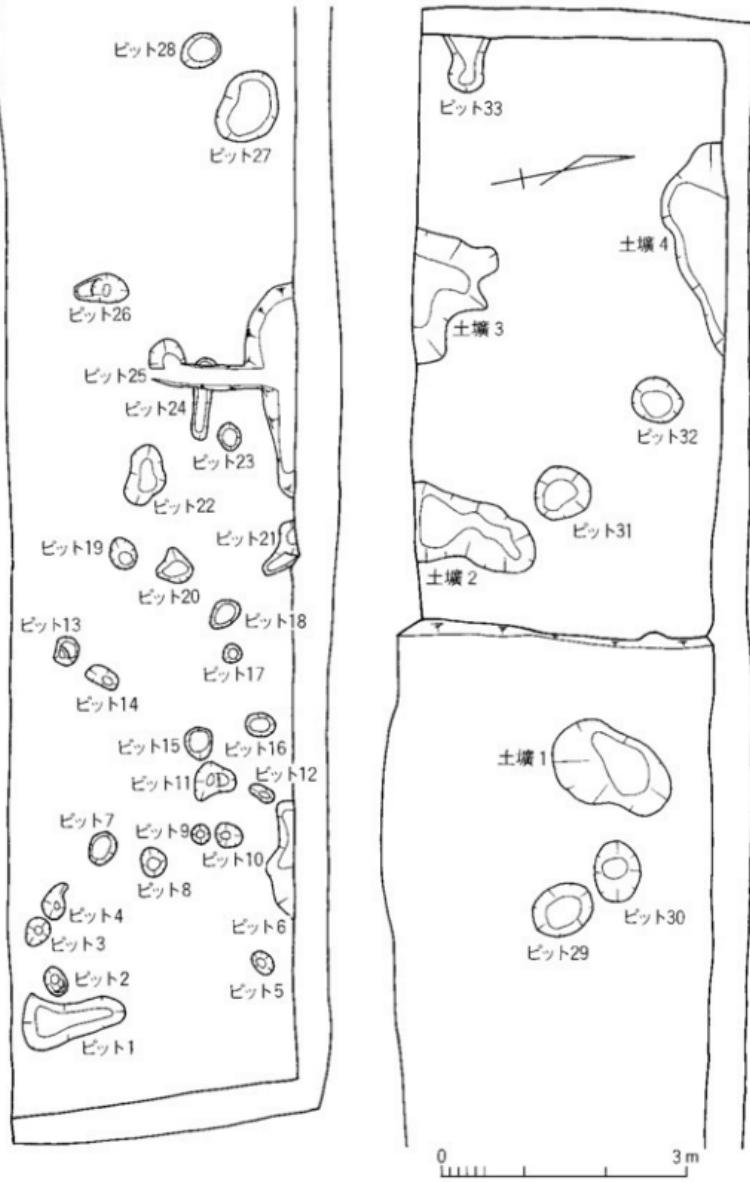
南西から北東に流れる溝、長さ1.36m分を検出した。幅は1.85m、深さは0.06mを測る。埋土は、灰褐色混疊土である。

溝3

西から東に流れ東側で2方向に分岐する溝、長さ1.52m分を検出した。幅は最も広いところで4.99m、北側支流は幅1.16m、南側支流は幅4m、深さは0.2mを測る。埋土は、灰褐色混疊土。



挿図6 第1トレンチ平面図



挿図7 第2トレンチ平面図

種別	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	遺物
土 壤1	不整形	(1.0) × 0.81	0.16	灰褐色粘質土に黒灰色粘質土がブロック状に混じる	弥生土器
	2 不整形	2.72 × (0.75)	0.445	褐褐色混疊弱粘質土	
ピット1	不整形	0.41 × (0.29)	0.155	褐灰色土	弥生土器
	2 不整形	0.45 × (0.41)	0.125	褐灰色土	
	3 円 形	0.31 × 0.31	0.265	褐灰色土	弥生土器
	4 不整形	0.94 × (0.46)	0.095	褐灰色土	土箇器
	5 槍円形	0.34 × 0.24	0.07	褐灰褐色土	
	6 腹丸形	0.28 × 0.25	0.055	褐灰褐色土	
	7 不整形	0.36 × 0.32	0.19	褐灰色土	弥生土器
	8 不整形	0.51 × 0.35	0.1	褐灰褐色土	土箇器
	9 不整形	0.53 × 0.32	0.285	褐灰色土	弥生土器 土箇器
	10 不整形	0.80 × (0.3)	0.04	褐灰褐色土	
	11 腹丸形	0.33 × 0.32	0.13	褐灰褐色土	
	12 不整形	0.47 × 0.36	0.09	褐灰褐色土	
	13 腹丸形	0.25 × 0.24	0.09	褐灰褐色土	弥生土器
	14 腹丸形	0.21 × 0.19	0.08	褐灰褐色土	
	15 不整形	0.40 × 0.23	0.19	褐灰褐色土	

表6 第1トレーニチ 土壌・ピット一覧表

である。

溝4

西から東に流れる溝、長さ1.36m分を検出した。幅は2.46m、深さは0.19mを測る。埋土は、灰褐色混疊土である。

土壌

土壌2を検出した。規模等については、表6を参照されたい。

ピット

ピット15を検出した。規模等については、表6を参照されたい。

第2トレーニチ

土壌4、ピット33を検出した。

土壌

土壌4を検出した。規模等については、表7を参照されたい。

ピット

ピット33を検出した。規模等については、表7を参照されたい。

種別	平面形	規模(m)	深さ(m)	土色・土質	遺物
土壌1	不整形	1.54 × 0.96	0.235	暗灰褐色混練土	
2	不整形	1.57 × 0.92	0.535	暗褐色混練粘質土	
3	不整形	1.68 × (0.99)	0.225	暗灰褐色混練土	
4	不整形	2.62 × (0.8)	0.2	暗灰褐色混練土	
ピット1	不整形	1.28 × 0.74	0.135	暗灰黄色土(マンガンを含む)	
2	横円形	0.34 × 0.26	0.175	暗灰黄色土	
3	横円形	0.37 × 0.3	0.195	暗灰黄色土	
4	不整形	0.45 × 0.29	0.165	暗灰黄色土	
5	横円形	0.31 × 0.24	0.18	浅灰黄色土	
6	不整形	1.47 × (0.35)	0.16	浅灰黄色土	
7	横円形	0.41 × 0.34	0.18	浅灰黄色土	
8	横円形	0.36 × 0.32	0.045	浅灰黄色土	
9	円形	0.24 × 0.24	0.055	浅灰黄色土	
10	横円形	0.36 × 0.3	0.1	浅灰黄色土	
11	不整形	0.50 × 0.48	0.29	浅灰黄色土	
12	横円形	0.33 × 0.16	0.145	浅灰黄色土	
13	不整形	0.36 × 0.31	0.15	浅灰黄色土	
14	不整形	0.39 × 0.21	0.125	浅灰黄色土	
15	横円形	0.40 × 0.34	0.025	浅灰黄色土	
16	横円形	0.36 × 0.28	0.04	浅灰黄色土(マンガンを含む)	
17	横円形	0.49 × 0.31	0.25	浅灰黄色土	土師器
18	不整形	0.44 × 0.42	0.045	黄灰色土(マンガンを含む)	
19	円形	0.23 × 0.24	0.03	黄灰色土	
20	不整形	0.43 × 0.31	0.025	黄灰色土	
21	不整形	0.59 × (0.36)	0.17	黄灰色土	
22	不整形	0.74 × 0.43	0.125	浅灰黄色土	
23	横円形	0.35 × 0.29	0.05	黄灰色土	
24	不整形	1.00 × 0.27	0.11	黄灰色土	
25	円形	0.45 × 0.48	0.135	浅灰黄色土	
26	不整形	0.67 × 0.37	0.135	浅灰黄色土	
27	不整形	0.91 × 0.66	0.14	浅灰黄色土	弥生土器
28	横円形	0.50 × 0.41	0.06	浅灰黄色土	
29	横円形	0.78 × 0.63	0.13	浅灰黄色土	
30	横円形	0.72 × 0.56	0.08	浅灰黄色土	
31	不整形	0.67 × 0.66	0.155	暗灰褐色混練土	
32	横円形	0.60 × 0.53	0.135	暗灰褐色混練土	
33	不整形	(0.69) × 0.57	0.105	暗灰褐色混練土	

表7 第2トレンチ 土壌・ピット一覧表

3. 遺物

今回の調査では、トレンチ調査ということもあり遺物の出土量は少ない。出土遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・磁器などの容器類のはか瓦・石器・サヌカイトなどがある。遺物のほとんどは第1トレンチより出土している。以下、トレンチごとに出土遺物を概観したのち、主な遺物について観察を加える。

第1トレンチ(挿図9~11 図版8)

各遺構からの遺物出土状況は表8のとおりである。その大半は、住居址1と土壌1から出土した弥生土器である。他の遺構のものは、弥生土器と土師器があるが多くが碎片である。包含層では、第5層から弥生土器・土師器や石器の他、黒色土器や瓦器などの中世遺物が出土して

遺構・遺物	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	黒色土器	瓦器	土師質土器	須恵質土器	瓦質土器	陶器	磁器	瓦	石器	その他
住居址 1	○	○											○	サスカイト
溝 1		○												
土 墓 1	○													
ピット 1	○													
ピット 3	○													
ピット 4			○											
ピット 7			○											
ピット 8	○													
ピット 9	○	○												
ピット 10	○													

表8 各遺構出土遺物一覧表

いる。また、第3・4層からは、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器や石器の他、伊万里焼など近世遺物が出土している。

住居址1（挿図8-9 図版8）

縄文土器・弥生土器・石器・サスカイトの割片が住居の埋土中より出土している。また、柱穴1より弥生土器（挿図8-7）が出土している。

縄文土器

破片であるが1点ある。内面に黒色物質が塗布されている。

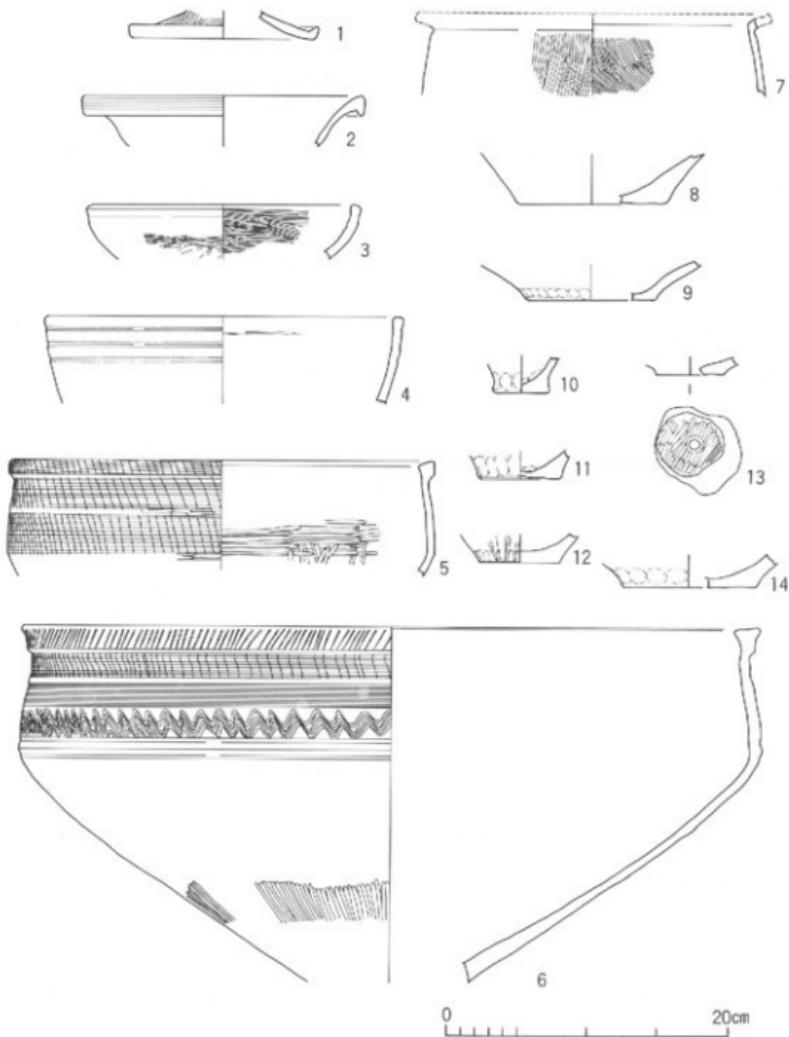
弥生土器（挿図8-1~14）

広口壺（挿図8-2）・細頸壺・高杯（挿図8-3）・脚（挿図8-1）・鉢（挿図8-4~6）・甕（挿図8-7）・底部（挿図8-8~14）がある。

広口壺（2）口径19.5cm、残存器高3.7cmを測る。口縁部は頸部からなだらかに外反する。口縁端部は下外方に拡張する。内外面、磨減と剝離のため調整不明。口縁部外面に櫛描文の痕跡をとどめる。色調は内外面茶褐色。胎土は粗。生駒西麓産。

高杯（3）口径18.4cm、残存器高3.9cmを測る。内縁気味に立ちあがる直口の口縁である。口縁部は上端に面をもつ。口縁部内外面ヨコナデ、杯部外面ヘラケズリの後一部ヨコ方向のヘラミガキ、杯部内面ヨコ方向のハケメ（10本/cm）。杯部外面に黒斑が認められる。色調は内面黄橙色、外面淡黄灰色。胎土は、やや良。

脚（1）幅径12.5cm、残存器高2.0cmを測る。高杯の脚据部。斜めに広がる裾部。裾端部は斜め上方に拡張する。据部内面ナデ、外面タテ方向のヘラミガキ。色調は内外面茶褐色。胎土はやや良。生駒西麓産。



挿図 8 住居址 1 出土遺物

鉢（4～6） 口縁部が直口のもの（4）と段状のもの（5・6）がある。

（4） 口径24.9cm、残存器高6.2cmを測る。内縄気味立ちあがる直口の口縁である。口縁部は上端に面をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面に凹線文が3条施される。色調は内面淡橙色、外面黄橙色。胎土は、やや良。

(5) 口径29.7cm、残存器高8.15cmを測る。口縁部は段状を呈し、端部は上端に内傾する面をもつ。体部はやや張り腹部に稜をもつ。口縁部内外面ヨコナデ、体部内部ヘラミガキ、体部外面下半ヘラミガキ。口縁部外面簾状文（原体5本）、体部外面上半簾状文（原体10本・11本）が2条施される。

(6) 口径51.8cm、残存器高25.2cmを測る。口縁部は直立し段状を呈し、端部は、内傾する凹面をもつ。体部はあまり張らず、上半に稜をもつ。口縁部内面ヨコナデ、体部外面下半タテ方向のヘラミガキ、他は磨滅と剝離のため調整不明。口縁部外面列点文（原体不明）、体部上半外面簾状文（原体17本）・直線文（原体16本）・波状文（原体17本）凹線文2条が施される。口縁部外面に黒斑が認められる。色調は内外面乳褐色。胎土は良。

甕(7) 残存器高5.65cmを測る。頸部から体部上半のみ残存。くの字に屈曲する頸部。体部はあまり張らない。頸部内外面ヨコナデ、体部内面ハケメ（9本/cm）、体部外面ハケメ（5本/cm）。色調は内面黄灰褐色、外面淡黄灰褐色。胎土は粗。

底部(8~14) 平底のもの（9・10・12・14）、上げ底のもの（8・11）、焼成前に穿孔されているもの（13）がある。

(8) 底径10.0cm、残存器高3.6cmを測る。上げ底。内外面磨滅と剝離のため調整不明。色調は内外面淡灰褐色。胎土は粗。

(9) 底径8.9cm、残存器高2.6cmを測る。平底。底部外面に指頭圧痕が残る。他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面暗灰色、外面淡灰褐色。胎土は良。

(10) 底径3.4cm、残存器高2.6cmを測る。平底。内外面に指頭圧痕が残る。他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面淡茶褐色、外面明橙色。胎土は良。

(11) 底径5.4cm、残存器高2.1cmを測る。上げ底。内外面に指頭圧痕が残る。他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内外面淡黃灰色。胎土はやや良。

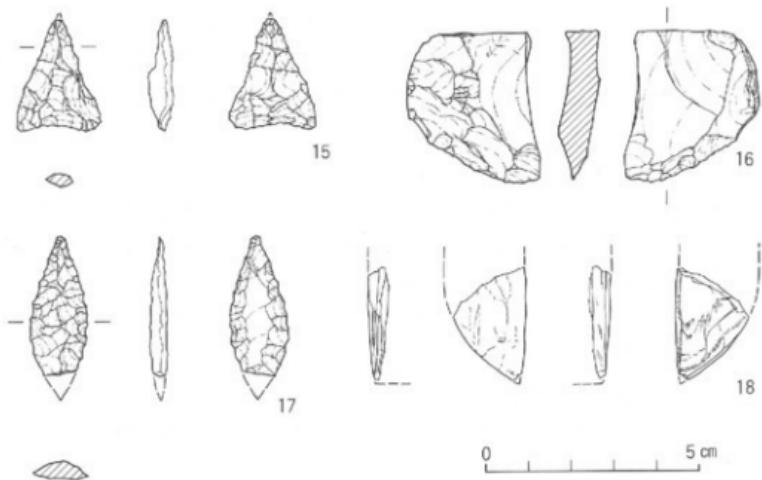
(12) 底径5.5cm、残存器高2.1cmを測る。平底。底部外面タテ方向のヘラミガキ下に指頭圧痕が残る。外底面指ナデ。他は剝離のため調整不明。色調は内面乳灰橙色、外面黄灰色。胎土は良。

(13) 底径4.7cm、残存器高1.25cmを測る。平底。焼成前に底部のはば中央に円孔が1孔穿たれている。外底面ヘラミガキ、他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内外面黒褐色。胎土は良。

(14) 底径9.0cm、残存器高2.45cmを測る。平底。外面ヨコナデ下に指頭圧痕が残る。外底面ナデ、他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面暗灰色、外面明橙色。胎土は良。

石 器（挿図9-15・16 図版8）

サヌカイト製の打製石器、石鎌（挿図9-15）・削器（挿図9-16）がある。



挿図9 住居址1・包含層出土石器

石鎌（15）最大長2.625cm、最大幅1.985cm、最大厚0.55cmを測る。凹基無茎式石鎌。先端を欠失。側辺の形態は直線的にのびる。基辺に最大幅をもつ。両面とも周辺から比較的丁寧な調整剝離が施されている。

削器（16）最大長3.105cm、最大幅3.53cm、最大厚1.115cmを測る。上辺と右辺に自然面が残る。下辺に調整剝離を施して刃部を作っている。

土壤1（挿図10・図版8）

弥生土器・サヌカイトの剥片が埋土中より出土している。

弥生土器（挿図10-19～28・図版8）

広口壺（挿図10-19）・高杯・鉢・蓋・把手・脚（挿図10-24）・甕（挿図10-23）・底部（挿図10-20～22）がある。

広口壺（19）口径14.5cm、残存器高11.9cmを測る。口縁部は、上下にわずかに拡張する。口縁部からゆるやかなカーブを描いて下り、体部は、丸みをもってはる。内外面磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面灰褐色、外面茶褐色。胎土は良。

脚（24）裾径15.3cm、残存器高12.4cmを測る。脚部は斜めに直線的に開く。裾端部は、ふんばる。内外面磨滅と剝離のため調整不明。円孔が3段7列焼成前に外から内下方に向かって1回で穿ち、凹線を2条巡らしている。色調は内面淡橙色、外面茶褐色。胎土は、やや粗。

甕（23）口径17.7cm、底径7.0cm、最大腹径21.0cmを測る。口縁部は大きく「く」の字に外反する。口縁端部は面をもつ。体部はゆるやかなカーブを描いて下方に下る。最大径を体

部上半にもつ。底部はわずかに上げ底。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タテ方向のヘラミガキ、内面上半ヨコ方向のヘラミガキ、下半ナデ下に指頭圧痕が残る。底部外面ヨコナデ、内面ナデ下に指頭圧痕が残る。外底面ナデ。体部外面に黒斑が認められる。色調は内外面暗褐色。胎土はやや粗。生駒西麓産。

（20） 底径6.6cm、残存器高6.0cmを測る。わずかに上げ底。底部外面上半タテ方向のヘラミガキ、下に指頭圧痕が残る。外底面一定方向のヘラミガキ。他は磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面暗灰褐色、外面明橙色。胎土は良。

（21） 底径9.4cm、残存器高3.7cmを測る。わずかに上げ底。内外面磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面明黄灰色、外面黒灰色。胎土はやや良。

（22） 底径8.3cm、残存器高4.5cmを測る。平底。底部外面タテ方向のヘラミガキ、一部ヘラミガキ下に指頭圧痕が残る。底部内面ヘラケズリ。他は磨滅のため調整不明。色調は内面暗灰褐色、外面淡灰褐色。胎土はやや良。

ピット8（挿図10）

弥生土器が埋土中より出土している。

弥生土器（挿図10-25）

壺・底部（挿図10-25）がある。

（23） 底径8.2cm、残存器高4.3cmを測る。上げ底。底部外面ヘラケズリ、外底面ヘラケズリ。他は磨滅のため調整不明。色調は内面淡茶褐色、外面茶褐色。胎土はやや粗。

ピット9（挿図10）

弥生土器・土師器が埋土中より出土している。

弥生土器（挿図10-26～28）

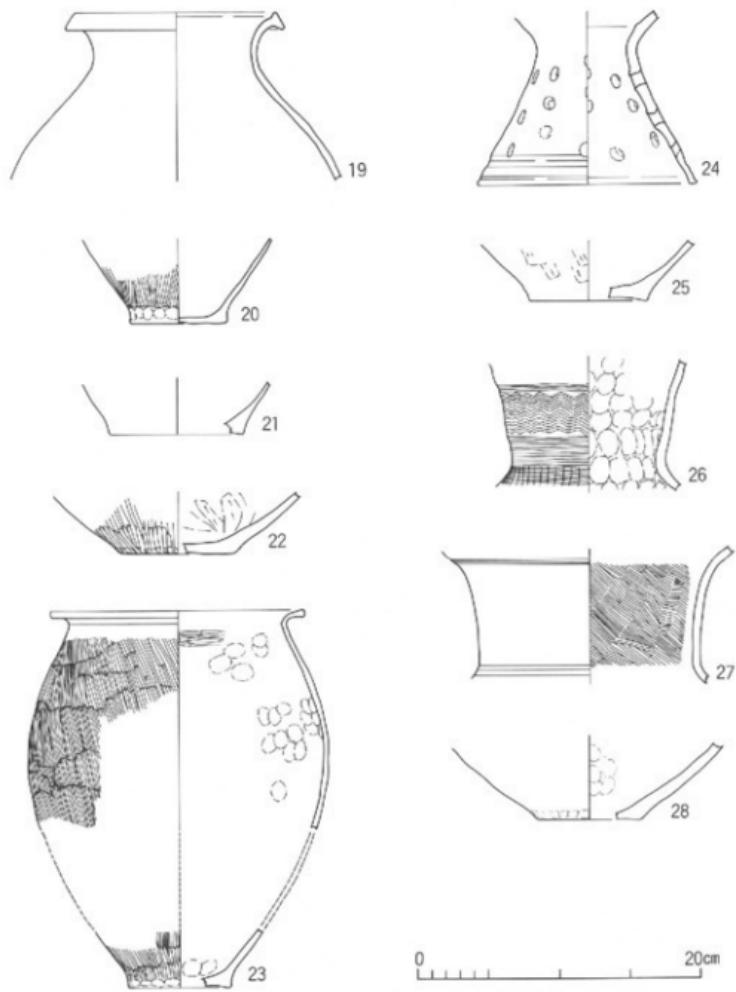
広口壺（挿図10-26・27）・底部（挿図10-28）がある。

広口壺（26・27） いずれも頸部のみ残存する。

（26） 頸基部径11.05cm、残存器高9.35cmを測る。頸部は筒状を呈す。内面指頭圧痕が残る。外面磨滅と剝離のため調整不明。外面直線文（原体5本以上）・波状文（原体25本）・直線文（原体20本）・纏状文（原体12本以上）が施されている。色調は内面淡橙色、外面淡橙灰色。胎土はやや粗。

（27） 頸基部径15.65cm、残存器高9.55cmを測る。頸部は筒状を呈す。内面ハケメ、外面磨滅と剝離のため調整不明。色調は内面淡灰黄色、外面淡灰橙色。胎土は良。

（28） 底径7.2cm、残存器高5.4cmを測る。平底。内外面磨滅しているが、一部指頭圧痕が残る。



挿図10 土壌1・ピット8・9出土土器

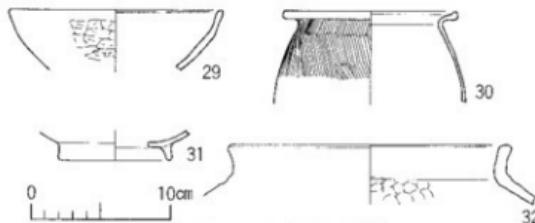
包含層（挿図9・11 図版8）

第5層（挿図9・11 図版8）

弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・石器・サスカイトの剝片が出土している。

弥生土器（挿図11-30）

広口壺・高杯・鉢・甕（挿図11-30）・脚・底部がある。



挿図11 包含層出土遺物

土師器

小皿がある。

須恵器

碎片である。

黒色土器（挿図11-29）

椀（挿図11-29）がある。

椀（29）口径14.85cm、残存器高4.4cmを測る。内黒の椀である。内彎きみに立ち上がり、口縁部はわずかに外反して開く。口縁端部内面に1条絞線が巡る。体部外面、ヘラミガキ、他は磨滅のため調整不明。色調は内面黒色、外面乳茶褐色。胎土は精良。

瓦器

椀がある。

石器（挿図9-17 図版8）

サヌカイト製の打製石器、石鎌（挿図9-17）がある。

石鎌（17）最大長3.31cm、最大幅1.315cm、最大厚0.44cmを測る。尖基無茎式石鎌。基部を欠失している。側辺がふくらみをもつて柳葉形のものである。全体に薄い作りのものである。両面とも側辺から調整剝離を施している。B面には中央に主要剝離面が残る。

第3・4層（挿図9-11 図版8）

弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・磁器・石器・サヌカイトの石核・剝片が出土している。

弥生土器

甕・底部がある。

土師器（挿図11-32）

皿・杯・羽釜・壺（挿図11-32）・甕がある。

壺（32）口径19.5cm、残存器高19.5cmを測る。直立ぎみに開く口縁部。口縁端部は内傾する面をもつ。体部は大きく開く。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、体部内面ナデ下に

甕（30）口径12.1cm、残存器高6.5cmを測る。口縁部は、「く」の字に外反し、端部は上方に拡張。体部はあまり張らない。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメ（7本/cm）、他は磨滅と剝離のため調整不明。

指頭圧痕が残る。色調は内面茶褐色、外面暗茶褐色。胎土はやや粗。

須恵器

蓋杯・壺がある。

黒色土器（挿図11-31）

椀（挿図11-31）がある。

椀（31）高台径7.8cm、高台高1.28cm、残存器高2.2cmを測る。内黒の椀である。高台貼り付けのため高台部分はヨコナデ、見込み部分はナデ、他は磨滅のため調整不明。色調は内面黒色、外面乳橙色。胎土は精良。

瓦器

碗がある。

磁器

碗がある。

石器（挿図9-18 図版8）

磨製石器、柱状片刃石斧（挿図9-18）がある。

柱状片刃石斧（18）最大長2.65cm、最大幅1.66cm、最大厚0.44cmを測る。刃部のみ残存。

第2 トレンチ

第1 トレンチに比べると遺物の出土量はかなり少ない。ピット17から土師器・ピット27から弥生土器が数片出土しているにすぎない。包含層からは、第5層からは弥生土器、第4層からは弥生土器・土師器・須恵器・サヌカイトの剝片が数片づつ出土している。（田川）

4.まとめ

大阪府教育委員会が行った国道309号線の調査では、弥生時代中期の竪穴住居址群が検出されている。近年、市教育委員会が実施した国道309号線以南の遺跡南端部分の調査では、弥生時代の遺構は検出されず、円筒埴輪や中世遺物が多量に出土しており、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出されている。この調査地の東方に古墳時代中期の川西古墳があったこととの関係がうかがえる。

今回の調査は小規模の調査範囲ではあったが、調査区の北東部で弥生時代の竪穴住居址1棟を検出した。このことから、弥生時代の居住域の南限が本調査地付近と考えられる。国道309号線の北側では、竪穴住居址とともに方形周溝墓が検出され、遺跡の北端部が墓域であったことが判明しており、弥生集落の様相がしだいに明らかになってきた。（田川）

IV 錦織遺跡

錦織遺跡は市域南部の石川西岸の河岸段丘低位面に立地しており、遺跡の中央を旧国道170号線が走っている。その範囲は東西約300m、南北約900mで、南は近鉄長野線滝谷不動駅付近北は甲田との境界まで広がっている。遺跡の南端には、白鳳期の錦織廃寺も重なっている。

錦織遺跡は、包含層から北白川下層式の土器を出土することで、市内で最初に発見された縄文時代前期の遺跡として位置付けられてきた。その後、大阪府教育委員会や富田林市教育委員会の調査で、中世に至るまでの複合遺跡であることが明らかとなった。1989年の関西電力の鉄塔建設工事に伴う調査で、掘立柱建物の柱痕とともに縄文の円面硯や埴が出土し、奈良時代の集落が存在することが明らかとなった。遺跡周辺には、「日本書紀」に百濟郷という集落があり、百濟より移住の外来系氏族が居住していたと言われていることと一致する点でこの調査は重要な発見をもたらしたと言える。また、弥生から古墳時代への激動の時代を物語る庄内式土器も出土している。

(今西)

NK92

調査地：富田林市錦織415-2

調査面積：140m²／323.9m²

調査地は、旧国道170号線に面した遺跡のはば中央に位置する。現況は水田である。

平成4年10月5日に、埋蔵文化財発掘届出書が富田林市教育委員会社会教育課に提出され、鉄骨2階建の個人住宅の建設が計画されており、協議の結果、建物部分と浄化槽部分について発掘調査を実施することとなった。

調査は、平成4年10月22日から12月25日まで行った。まず、浄化槽部分を調査し、遺構の状態を把握した後、工事によって影響の及ぶ遺構面まで全面調査を行った。今回の調査では第1面の遺構を調査した。

1. 層序

基本的な層序は、上から順に第1層・耕土(20cm)、第2層・床土(4cm)、第3層・灰色土(4cm)、第4層・茶灰黄色土(7cm)、第5層・灰褐色砂質土(10cm)、第6層・濁黃灰色弱粘質土(6cm)、第7層・濁灰褐色弱粘質土(8cm)、第8層・濁灰褐色砂質土(8cm)、第9層・暗褐色混疊粘質土(40cm)が堆積する。遺構面は2面あり、第1面は第9層上面、第2面



挿図12 錦織遺跡調査位置図

は第9層下の地山である。

2. 遺構

溝1、土壙14、ピット61を検出した。

溝1

調査区の南端で長さ10.2m分を検出した。東西方向の溝で、東では分岐する。分岐点にはピット状の深まりがある。幅は最も広いところで2.6m、狭いところで0.3mある。深さは、最も深いところで0.23m、浅いところで0.03mである。

土壤

調査区の中央から北に集中している。大半が不整形な形状をしている。規模及び出土遺物については、遺構一覧表9を参照されたい。

ピット

土壤同様北半部に集中している。建物の検討も行ったが、配列については困難であった。以下、土師器小皿が集積しているピットについて解説を加える。その他のピットの規模及び出土遺物については、遺構一覧表9を参照されたい。

ピット1

調査区中央にある土壤1の南に位置するピットである。直径約0.5mのはぼ円形をしており、西側では一段深くなっている。最も深いところで0.095mある。直径約9cmの小皿がほとんど口縁部を下にした状態で平面的に重なっていた。埋土は炭片が混じる濁灰褐色土である。

ピット3

調査区北東部にあって、ピット24を切っている。直径約0.47mのはぼ円形をしている。深さは最も深いところで0.105mある。直径約9cmの小皿が平面的に重なっていた。ピット1ではほとんどが口縁部を下にしていたが、このピットは上に向いているものと下に向いているものがあった。埋土は暗褐色粘質土がブロック状に混じり、炭片を含む灰褐色土である。

ピット4

調査区の北東部、ピット3の東にある。側溝によって切られているため、正確な規模は不明である。南北約0.66m、東西約0.3m分を検出した。ほぼ中央部で一段深くなっている。最も深いところで約0.12mある。このピットはピット1・3の小皿出土状況と異なり無造作に重なっていた。また、皿と皿の間には炭が大量に詰まっていた。埋土は濁灰褐色土である。(今西)

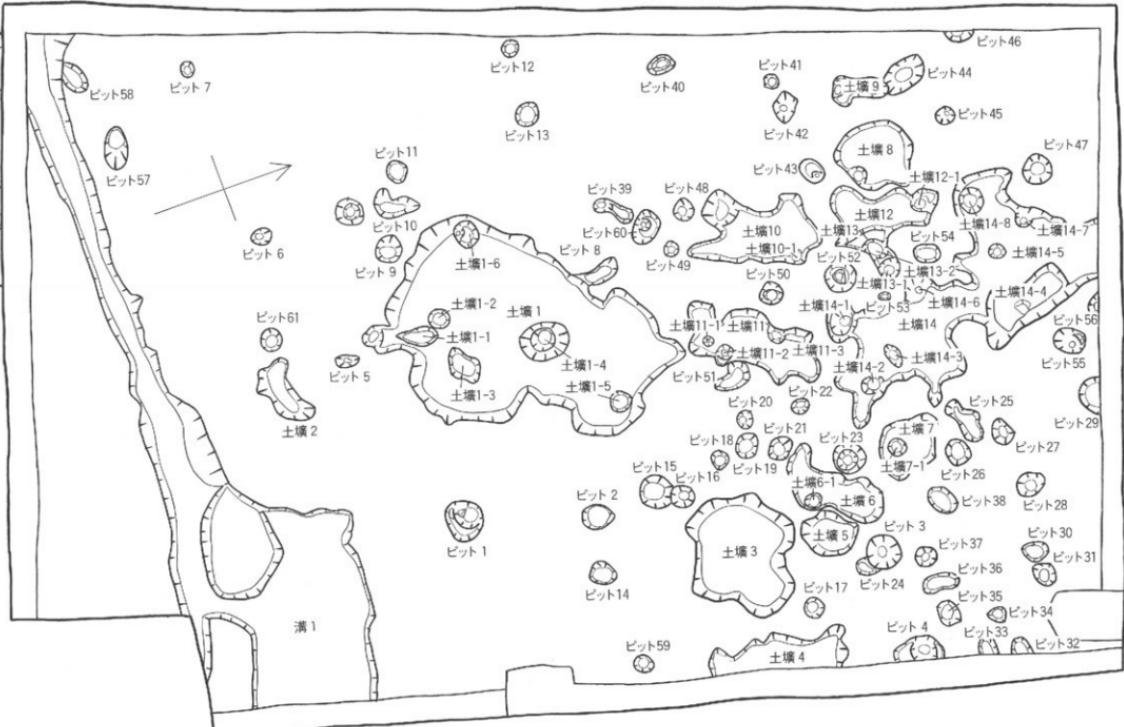


表 9 遺構一覽表

種類	形狀	規格(m)	深さ(m)	土 色・土 質	出 土 素 物	出 土 素 物
溝	1 不整形	10.21×2.64	0.225	測灰褐色砂質土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	サスカイト
溝	1 不整形	4.30×2.79	0.190	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	回転台土器・サヌカイト
土塹	1 不整形	0.54×0.27	0.125	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	1 不整形	0.29×0.27	0.115	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
円 形	1 不整形	0.44×0.37	0.075	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	1-3 不整形	0.64×0.51	0.280	測灰褐色砂質土と灰褐色土とが混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	回転台土器・サスカイト
土塹	1-4 構内形	0.30×0.29	0.090	測灰褐色砂質土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	製鐵土器
円 形	1 不整形	0.17×0.10	0.190	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	1-6 構 円 形	0.35×0.13	0.100	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	1-8 構 円 形	0.94×0.56	0.060	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	2 不整形	1.77×1.54	0.060	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	3 不整形	1.87×0.57	0.115	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	4 不整形	0.74×0.61	0.055	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	5 不整形	1.42×0.83	0.070	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	6 不整形	0.24×0.20	0.055	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	6-1 不整形	0.79×0.75	0.150	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	7 不整形	0.34×0.36	0.125	灰褐色土と粘褐色土質土がブロック状に混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	7-1 圓 形	1.02×0.93	0.200	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	8 不整形	0.73×0.40	0.260	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	9 不整形	1.80×1.01	0.090	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	10 不整形	0.12×0.11	0.170	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	10-1 不整形	1.99×0.84	0.111	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	11 圓 形	0.15×0.15	0.115	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	11-1 圓 形	0.08×0.09	0.130	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	11-2 圓 形	0.12×0.13	0.125	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	11-3 圓 形	0.15×0.69	0.060	測灰褐色土	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	12 不整形	0.14×0.13	0.105	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	12-1 圓 形	0.73×0.72	0.645	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	13 不整形	0.13×0.12	0.065	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	13-1 圓 形	0.23×0.12	0.145	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	13-2 圓 形	0.16×0.13	0.145	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
土塹	14 不整形	0.54×0.30	0.140	測灰褐色土と灰褐色土が混じる	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	

種別	形狀	風漿(m)	土色・土質	出土遺物		備考
				土頭	頭裏	
上漿4-2 植円形	0.20×0.15	0.140	瓦褐色土	○	○	○
上漿4-3 植円形	0.35×0.18	0.070	陶器褐色土に焼片が混じる	○	○	○
上漿4-4 不整形	0.69×0.49	0.125	陶灰褐色土	○	○	○
上漿4-5 円形	0.22×0.20	0.080	陶器褐色土に焼片が混じる	○	○	○
上漿4-6 円形	0.90×0.90	0.025	陶灰褐色土に焼片が混じる	○	○	○
上漿4-7 円形	1.00×0.90	0.070	陶器褐色土に焼片が混じる	○	○	○
上漿4-8 不整形	0.33×0.31	0.195	陶灰褐色土に焼片が混じる	○	○	○
ピット1 円形	0.50×0.53	0.095	陶灰褐色土に焼片が混じる	○	○	○
ピット2 植円形	0.43×0.34	0.045	陶灰褐色土に焼片が混じる	○	○	○
ピット3 円形	0.46×0.47	0.105	瓦褐色土に陶器褐色質土がブロック状に混じり、灰を多量に含む	○	○	○
ピット4 不整形	0.66×0.30	0.125	陶灰褐色土	○	○	○
ピット5 植円形	0.32×0.19	0.130	陶器褐色土	○	○	○
ピット6 植円形	0.28×0.24	0.135	陶器褐色土	○	○	○
ピット7 植円形	0.19×0.22	0.075	陶器褐色土	○	○	○
ピット8 円形	0.36×0.35	0.190	陶灰褐色土	○	○	○
ピット9 円形	0.37×0.37	0.135	陶器褐色土	○	○	○
ピット10 不整形	0.60×0.50	0.155	陶器褐色土	○	○	○
ピット11 植円形	0.32×0.27	0.220	陶器褐色土	○	○	○
ピット12 円形	0.23×0.23	0.155	陶器褐色土	○	○	○
ピット13 円形	0.31×0.32	0.120	陶器褐色土	○	○	○
ピット14 不整形	0.35×0.31	0.060	陶器褐色土	○	○	○
ピット15 円形	0.42×0.45	0.070	陶器褐色土	○	○	○
ピット16 円形	0.31×0.30	0.120	陶器褐色土	○	○	○
ピット17 植丸形	0.28×0.30	0.070	陶器褐色土	○	○	○
ピット18 円形	0.23×0.25	0.100	陶器褐色土	○	○	○
ピット19 植丸形	0.34×0.28	0.130	陶器褐色土	○	○	○
ピット20 円形	0.22×0.22	0.080	陶器褐色土	○	○	○
ピット21 植丸形	0.31×0.27	0.095	陶器褐色土	○	○	○
ピット22 不整形	0.24×0.22	0.160	陶器褐色土	○	○	○
ピット23 円形	0.44×0.42	0.305	陶器褐色土	○	○	○
ピット24 不整形	0.24×0.20	0.065	医神土に陶器褐色質土がブロック状に混じる	○	○	○
ピット25 不整形	0.64×0.30	0.070	陶器褐色土	○	○	○
ピット26 植丸形	0.35×0.32	0.045	陶器褐色土	○	○	○
ピット27 不整形	0.33×0.25	0.075	陶器褐色土	○	○	○
ピット28 植円形	0.38×0.32	0.230	医神土に陶器褐色質土がブロック状に混じる	○	○	○

性別	形狀	規模(m)	深度(m)	土 色・土 質		出上漬物 土面深黒色瓦	出上漬物 瓦
				土面	底面		
ビット29	不整形	0.59×0.77	0.140	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット30	不整形	0.38×0.26	0.050	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット31	不整形	0.35×0.28	0.050	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット32	不整形	0.29×0.20	0.010	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット33	不整形	0.24×0.24	0.115	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット34	不整形	0.24×0.22	0.165	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット35	圓角方形	0.34×0.27	0.060	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット36	不整形	0.49×0.25	0.060	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット38	橢円形	0.29×0.26	0.150	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット39	橢円形	0.45×0.31	0.050	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット40	不整形	0.56×0.21	0.045	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット41	圓角方形	0.30×0.25	0.165	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット42	不整形	0.37×0.29	0.230	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット43	圓角方形	0.34×0.27	0.070	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット44	不整形	0.58×0.39	0.245	海灰褐色土に炭片が混じる		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット45	円 形	0.26×0.24	0.235	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット46	不整形	0.39×0.16	0.210	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット47	円 形	0.39×0.41	0.215	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット48	円 形	0.27×0.30	0.065	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット49	円 形	0.20×0.22	0.050	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット50	不整形	0.29×0.29	0.170	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット51	不整形	0.52×0.34	0.040	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット52	円 形	0.42×0.40	0.220	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット53	橢円形	0.17×0.13	0.065	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット54	橢円形	0.35×0.26	0.220	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット55	橢丸方形	0.42×0.31	0.190	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット56	不整形	0.36×0.15	0.105	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット57	橢円形	0.32×0.57	0.170	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット58	橢円形	0.48×0.28	0.045	灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット59	不整形	0.43×0.36	0.115	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
ビット60	円 形	0.30×0.32	0.100	海灰褐色土		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	

3. 遺物

今回の調査で土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器、製塙土器、瓦、埴輪、壇、土鍤、鉄製品、石器が出土している。その中でも、土師器、黒色土器、瓦器を中心とする古代末から中世にかけての資料が多量に出土している。遺構から出土した遺物の種類はすでに表9で見たとおりである。この他、包含層、特に第6層～第9層からは遺物が多量に出土しているが、その中には遺構出土のものと接合するものが多く認められる。ここでは、主な遺構から出土したものと、遺構出土遺物として遺構の所属時期にかかる遺物を図化したものを中心記述する。次に、包含層出土の遺物の中から遺構の年代に連なる資料を抜き出し層位を考えずに、
2. 包含層出土遺物として記述する。

なお、出土遺物の中には明らかに遺構の所属時期でないものが含まれる。石器遺物、埴輪、6～8世紀にかけての土師器、須恵器、奈良時代の壇、製塙土器がそれである。また、所属時期の不確実な土鍤、鉄製品を含めて、3. その他の遺物としてまとめて記述する。

1. 遺構出土遺物

（1）溝1（挿図14・1～7・図版14・15）

土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、サヌカイトが出土している。

土師器には皿、杯、羽釜がある。皿には口径8cmと10cmを測る皿Aと口径15cm～20cmを測る皿Bがある。皿Aの口縁部は外反して端部は丸くおさまる。外面は体部と底部の境に稜をもつもの（1）、口縁部は外反して端部は丸くおさまり、外面は丸みをもって底部にいたるもの（2）がある。皿Bには口縁部が丸くおさまるもの（3）と口縁部内面に沈線のめぐるものがある。杯は高台の付いたものが出土している。高台には断面四角形のしっかりとしたものと断面三角形の小さなものがある。羽釜（4）は内傾した後、外反する口縁部をもつ。

黒色土器はすべてA類である。椀が出土しているが、口縁部内面に沈線のめぐるものと、丸くおさまるものがある。前者は体部外面に横方向のヘラミガキが施されている。後者は内外面ともヘラミガキが施されている。

瓦器には皿と椀がある。皿（5）の口縁部は外反して、端部は丸くおさまる。体部は口縁部との境に稜をもちながら底部にいたる。口縁部は横なで調整が、体部外面はなで調整が施されている。内面は磨滅のため調整がわからない。底部外面は粘土結合痕が認められる。椀（6）は口径15.1cm、器高4.7cm、器高指数31.1を測る。口縁部と体部の境はくぼむ。口縁端部は丸くおさまる。高台は断面三角形である。口縁部は内外面とも横なで調整、ただし内面には一部に、横方向のヘラミガキが施されている。体部外面は粘土紐巻き上げ痕が一部に残り、それに対応するような形で、指頭圧痕の列が三段にわたって並んでいる。外面はヘラミガキが認め

られない。内面はなで調整の上から、細筋の粗いヘラミガキが横方向と縦方向に入り交じっている。見込みは円状のヘラミガキの上に平行線状のヘラミガキが重ねられている。この他、見込みに斜格子状のヘラミガキが認められるものもある。いずれにしても、ヘラミガキは細くて粗い。

(2) 土器1 (挿図14・8~24、29、30・図版14・15)

土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、サヌカイトが出土している。

土師器には皿と杯と羽釜がある。皿には口径10cm前後の皿Aと口径15cm前後の皿Bがある。皿Aには口縁部内面に段をもち、外面に細筋の沈線をめぐらせ、全体に「て」の字口縁に近い形態を呈し、体部は丸みをもちらながら底部にいたるもの(8)、口縁部は内面に沈線をめぐらせ、外面は体部との境で屈曲して底部にいたるもの(9)、口縁部は外反し、端部を丸くおさめ、外面は体部との境で稜をもって底部にいたるもの(10)、口縁部は外傾し、短部を丸くおさめ、そのまま底部にいたるもの(11)がある。なお、(11)の底部は回転糸切り痕をもつ、いわゆる回転台土師器である。皿Bは、すべて口縁端部を丸くおさめるが、口縁部が大きく開き、横なで調整を数回にわたって施し、深めの体部をもつもの(14)と口縁部は一回の横なでで外反させ、そのまま底部にいたるもの(15)がある。杯には口径15cm程度で高台の付かない杯Aと口径10cm前後で高台の付く杯Bがある。杯A(16)(17)は口縁部がわずかに外反し、端部が丸くおさまる。杯Bには口縁部が外反気味に開いて、端部が丸くおさまり、浅めの体部に大きめの高台が付くもの(12)と口縁部は丸くおさまり、浅い椀状の体部と断面三角形の高台をもつもの(13)がある。羽釜には口縁部が、内傾した後大きく開くもの(29)と内傾する口縁部をもつもの(30)がある。前者は厚手の羽釜で、ほぼ水平の鋸がめぐる。後者はやや薄手で、上向きかけんの鋸がめぐる。ともに口縁端部は丸くおさまる。口縁部は横なで調整が、体部は内外面ともなで調整が施されている。なお、(30)は体部の外面に一部、平行タタキ調整が認められる。鋸部下面から下は煤が付着している。

黒色土器はA類が出土しているが、残存状態はあまり良くない。椀(18)は口縁端部が丸くおさまり、調整は外面になで調整が認められる以外、磨滅のためわからない。また、この土器は他の黒色土器に比べると、胎土が精良で、瓦器のような土質である。この他、断面四角形でふんばるような高台をもつものも認められる。

瓦器には皿と椀がある。皿(19)~(21)は口径8.5cm~10cmを測る。口縁部と体部の境にかすかに稜をもつ。口縁部はすべて丸くおさまる。口縁部は横なで調整で、一部、上から横方向のヘラミガキが付加されている。体部は内外面とも横方向のヘラミガキが施されているが、空白部が目立つ。外底面はすべて平行線状のヘラミガキが施されているが、かなり密に施されて

いるものとそれほど密でないものが認められる。見込みには平行線状のヘラミガキが施されるもの(20)(21)、不規則なヘラミガキが施されるもの(19)がある。体部から底部にかけてはヘラミガキの前になで調整が施されているものが多いが、ヘラケズリ調整の認められるものもある。椀(22)～(25)は口径14.3cm～15.3cm、器高5.2cm～5.6cm、器高指數36.3～40.1を測る。口縁部はすべて丸くおさまる。口縁部は横なで調整の上から横方向のヘラミガキが施されているが、かなり密に施されているものと粗いものがある。体部は内外面ともなで調整が施されているが、外面は凹凸がはげしい。外面のヘラミガキは上位が横方向で、中位以下は不規則で方向が定まらないものが多い。ヘラミガキの大半は体部の2/3付近で終わっているが、(25)は高台付近まで施されている。内面のヘラミガキは口縁部付近は横方向に、体部は中位以下がほぼ斜方向にではあるが不規則なヘラミガキがかなり密に施されている。見込みは斜格子のもの(25)、不規則なもの(22)(24)がある。後者の方が多く出土している。この他、量は少ないが、体部外面の調整にヘラケズリが施されているものがある。ヘラケズリの上のヘラミガキはかなり粗く、不規則な方向に施されている。

(3) 土壙1-4 (挿図14・26～28)

土師器と瓦器が出土している。

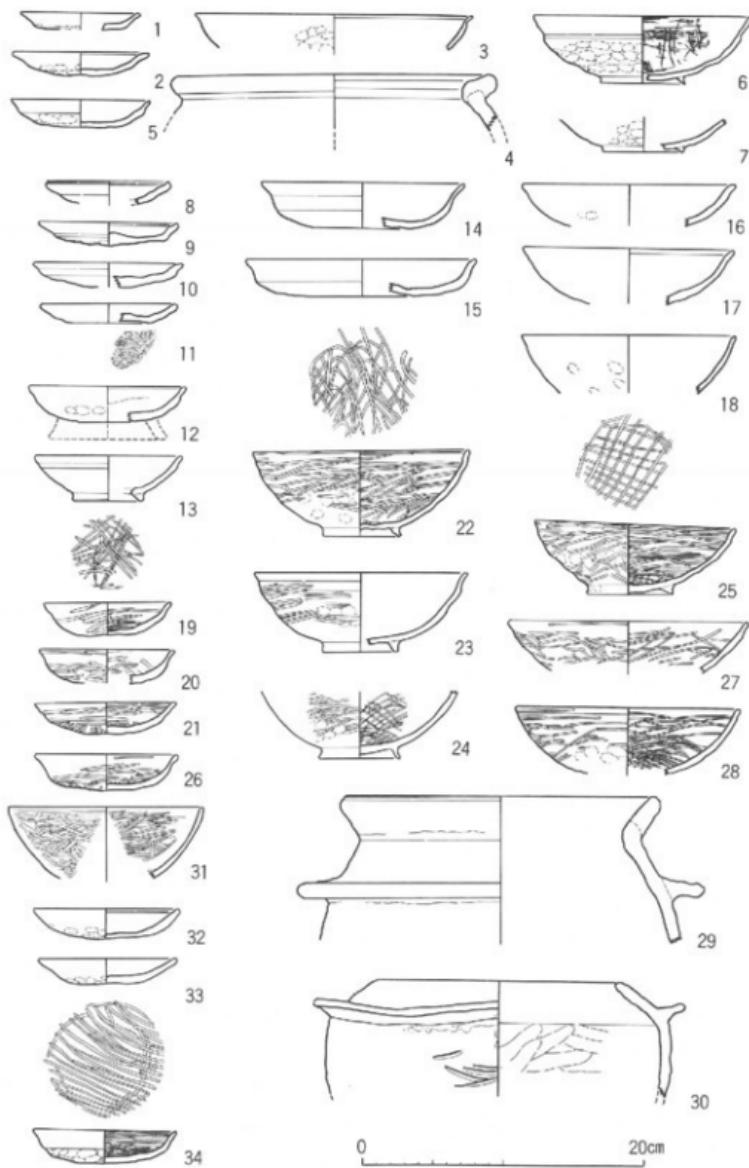
土師器には皿がある。口径10cm前後の皿Aで平坦な底部にかるく上方へ折り曲げる口縁部をもつ。

瓦器には皿と椀がある。(26)皿は口径10cmを測る皿Aである。口縁部は外反ぎみに開き、端部は丸くおさまる。底部は丸みをもつ。口縁部は内外面とも横なで調整で、内面には一部、上から横方向のヘラミガキが施されている。底部は内外面とも平行状のヘラミガキが施されているが密でない。見込みのヘラミガキは平行線の上から圓線を重ねるように施されているが、方向性は認められない。椀(27)は口径16.7cm、(28)は口径15.5cmを測る。ともに器高指數がおそらく35程度を測る。口縁部はほぼまっすぐに開き、口縁端部は丸くおさまる。口縁部は内外面とも横なで調整が施されている。外面の一部には横方向のヘラミガキが施されている。体部は内外面とも、なで調整の上から不規則な方向に細筋のヘラミガキが施されている。(28)は内面のヘラミガキは密であるが、外面は粗い。(29)は内外面とも粗く、空白部が目立つ。なお、体部外面は凹凸が著しく認められる。

(4) 土壙10-1 (挿図14・31)

土師器、瓦器が出土している。

瓦器には椀がある。口縁端部は丸くおさまる。外面のヘラミガキは口縁部上端部まで施されて



挿図14 遺構出土遺物

いるものと、口縁部は横なのでのままでヘラミガキが施されているもの(31)がある。体部のヘラミガキは不規則な方向に施されている。なお、(31)は炭素の吸着が悪く、外面半分は灰色を呈す。

(5) 土壙11 (挿図14・32 図版15)

土師器が出土している。

皿が2点出土している。(32)は口径10.1cmを測る皿Aで、口縁部が外傾し、端部は内面に沈線がめぐる。口縁部は内外面ともなで調整が施されている。底部外面には粘土結合痕が底部のほぼ中央から口縁部に向かって「く」の字状に認められる。粘土板は左回りに押しのばしたらしく指頭圧痕が左回りの方向に螺旋状に認められる。また、それに対応するように、内面にも指頭圧痕による凹凸が右回りの方向に認められる。

(6) 土壙11-1 (挿図14・33、34 図版14・15)

土師器と瓦器が出土している。

土師器には皿と碗がある。(33)は口径9.7cmを測る皿Aで、口縁部が外傾し、端部は丸くおさまる。口縁部は内外面ともなで調整が施されている。底部外面には粘土結合痕が底部のほぼ中央から口縁部に向かって半円を描くように認められる。体部は内外面ともなで調整が施されている。

瓦器には皿と碗がある。(34)は口径10.0cmを測る皿で、口縁部が外傾し、端部は丸くおさまる。口縁部外面はなで調整が、内面は横方向のヘラミガキが密に施されている。見込みには平行線状のヘラミガキが粗く施されている。外面は粘土結合痕が底部周辺をとりまくように大きな半円を描いて認められる。また、結合部を強くするために押さえたらしく、指頭圧痕が特に顯著に粘土結合痕の上に残っている。

(7) 土壙13出土遺物 (挿図15・35~40、図版14)

土師器、須恵器、瓦器が出土している。出土点数は少ないが、瓦器碗の内面調整であるヘラミガキがバラエティーに富んでいる。

土師器には杯がある。3点出土している。その内の1点は台付きで、接地部分が張り出しうんばる形態を呈す。

須恵器は瓶(40)が1点出土している。口縁部は大きく外反し、端部は上方にわずかに肥厚する。体部は張り出さない。調整は内外面とも回転などで施されている。

瓦器は碗がある。8点出土しているが器形はほぼ同じである。口径は14.8cm~16.4cm、器高は5.6cm~6.1cm、器高指数は36.9~39.3を測る。口縁部は外反ぎみに開き、丸み

をもって底部にいたる。高台は断面三角形のものと断面四角形のものがある。口縁部には横なで調整が施されている。体部から底部にかけて、内外面には、なで調整の後ヘラミガキが施されている。体部外面は凹凸が目立つ。ヘラミガキは太く、内面は密に、外面は粗く施されたものから、内外面とも細くて粗く施されたものがある。前者のヘラミガキが認められるものの中には、口縁部については一部だけ横方向に施されたものと、全く施されていないものがある。体部外面は不規則な方向のものが混じりながらも、ほぼ横方向に体部の2/3付近まで施されている。内面は不規則な方向に施されるものと、見込みからのびてきた放射状のヘラミガキが曲線を描きながら口縁部に向かうもの（35）がある。見込みのヘラミガキは前述した放射状のもの他、平行線状のもの（36）もある。後者（38）には口縁部から体部下位までは横方向のヘラミガキが施されている。見込みは粗い平行線の上に斜格子を付加したヘラミガキが施されている。なお、体部外面に粘土紙の巻き上げ痕が認められるもの（35）があり、中位と底部付近にはば水平方向に認められる。

（8）土壙14（挿図15・41 図版15）

土師器、瓦器、須恵器、製塩土器、埴、サヌカイトが出土している。

土師器には皿がある。（41）は口径9.4cmを測る皿Aである。口縁部が「て」の字状を呈す。底部外面には粘土結合痕がほぼ中央から口縁部に向かって「く」の字状に認められる。内底面にも若干、位置はずれるものの粘土結合痕が認められる。この他、細片ではあるが、器壁の厚みからみて皿Bらしきものも認められる。底部に回転糸切り痕をもつ回転台土師器である。

瓦器には椀がある。口縁部はすべて丸くおさまる。内外面のヘラミガキは太く、密に施されている。見込みのヘラミガキは斜格子と平行線状のものがある。

（9）土壙14-1（挿図15・42）

土師器と黒色土器がある。

土師器には皿がある。（42）は口径10cmを測る皿Aで、口縁部はわずかにつまみあげ、端部は丸くおさまる。

（10）ピット1（挿図15・43～54 図版16）

土師器の皿が完形で12点出土している。皿は口径9.1cm前後で、器高1.5cm前後を測る。すべて同じ胎土、同じ調整で作られている。すなわち、口縁部は外反して、端部は丸くおさまる。口縁部と底部の境は屈曲している。口縁部内外面は一回の横なで調整、底部内面は不定方向のなで調整、外面は指頭圧痕のため凹凸が残るもの、なで調整が施されている。色調は赤褐色

で胎土は粗い。調整にあたって、まず、底部内外面を調整した後、口縁部を整えている。これらの内の6点には粘土結合痕が認められる。(45)と(52)は粘土結合痕が特に明瞭に残る。とりわけ、(52)は結合時にかなり大きくひねったらしく、中央から大きく円を描きながら口縁部との境まで伸びている。(45)はほぼ中央から「く」の字状に認められる。

(11) ピット2 (挿図15・55~57 図版15)

土師器、瓦器、須恵器が出土している。

土師器には皿が2点ある。大きさには若干、差異のあるものの、2点とも同じ胎土、同じ調整である。底部は粘土紐を左回りに巻いて作つた痕跡が明瞭に残る。口縁部は最後に横なで調整を施して整えている。

瓦器は椀が1点ある。(57)は口径13.7cmを測る。口縁端部は丸くおさまる。口縁部は横なで調整の上から、外面の一部分に横方向のヘラミガキが施されている。体部外面はヘラケズリの上から粗いヘラミガキ、内面はなで調整の上から粗いヘラミガキを施している。

須恵器は細片のため、器種は不明である。

(12) ピット3 (挿図15・58~86 図版16)

土師器、瓦器、須恵器が出土している。

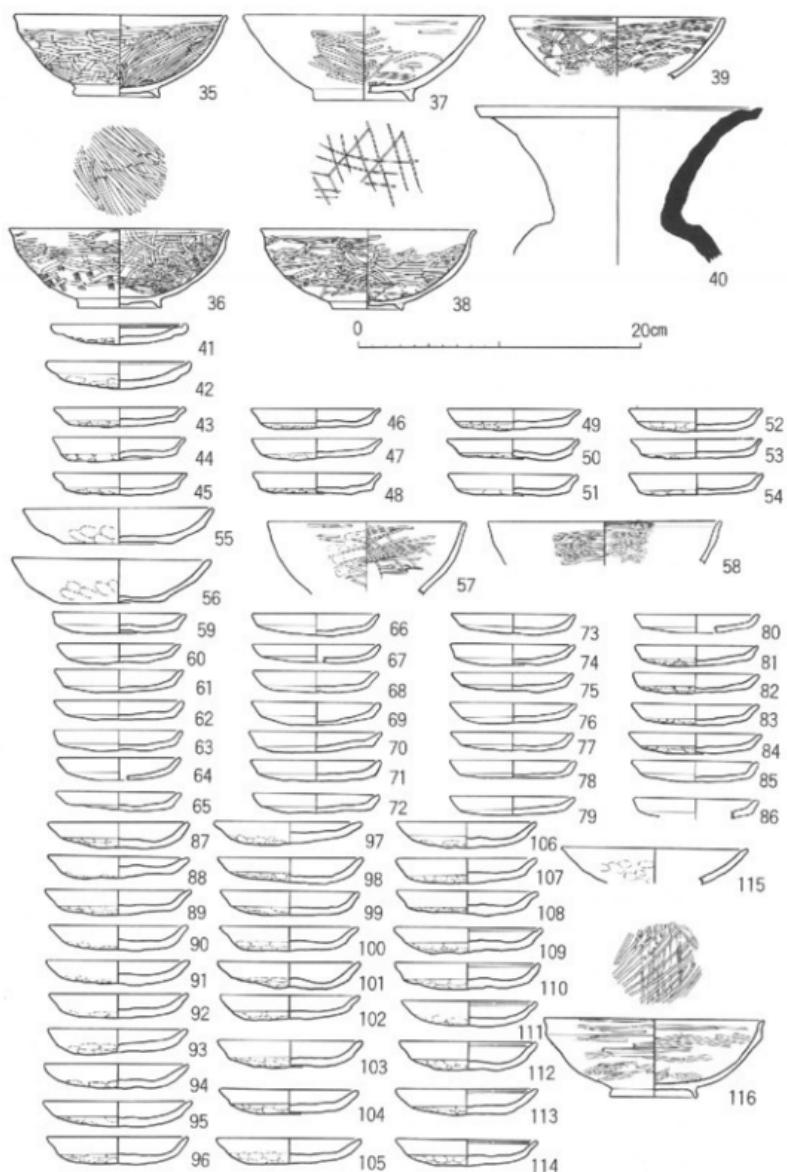
土師器は皿がほぼ完形も含めて、完形が29点、細片が4点出土している。口径8.5cm前後、器高1.5cm前後を測る。これらはすべて同じ胎土、同じ調整である。すなわち、口縁部は外傾して、端部は丸くおさまり、口縁部と底部の境には稜をもつ。底部は内外面ともなで調整が施されているが、口縁部より先にはば一定方向に丁寧に施されていて凹凸が少ない。底部外面には粘土結合痕が認められるものもあるが、全体に残っている範囲も狭くわかりにくい。色調は淡黄白色で、胎土は精良である。

瓦器は口径16.2cmを測る。口縁端部は丸くおさまる。口縁部は内外面とも横なで調整が施されているが、内面は上から横方向のヘラミガキが付加されている。体部は外面には不規則なヘラミガキが、内面には横方向と斜方向が交差したようなヘラミガキが施されている。

(13) ピット4 (挿図15・87~114 図版17)

土師器、瓦器、須恵器が出土している。瓦器、須恵器とも細片である。

土師器には杯と皿がある。杯は2点あり、口縁部内面には沈線がめぐる。皿はほぼ完形も含めて、完形が35点、細片が2点出土している。口径8.8cm~10.35cm、器高1.5cm~2.22cmを測る。これらはすべて同じ胎土で、同じ調整であるが、整形具合に若干差異がある。すなわち、



挿図15 遺構出土遺物

口縁部は丸くおさまるものと内面に沈線のめぐるものがある。また、口縁部と底部の境には稜をもつものともたないものがある。口縁部の形態と底部の形態には相関関係はなく、単に調整時のなで方によって生じただけのようである。調整は口縁部内外面と内底面の一部を最初、数回横なでし、その後、底部内外面になで調整を施している。この時のなで調整は非常に難で、口縁端部にまでなでがおよび、そのために器形の変形を招く結果になっている。また、底部外面は凹凸が顕著に残るものが多い。色調は淡白橙色で、胎土は粗い。底部外面には粘土結合痕が認められるものが多い。

(15) ピット44 (挿図15・115)

土師器、黒色土器、瓦器、須恵器が出土している。

土師器には皿がある。(115)は口径13.1cmを測る。口縁部は外傾して大きく開き、端部は丸くおさまる。口縁部の内外面は横なで調整が施されている。

黒色土器はB類である。

(16) ピット52 (挿図15・116)

土師器、須恵器、瓦器が出土している。

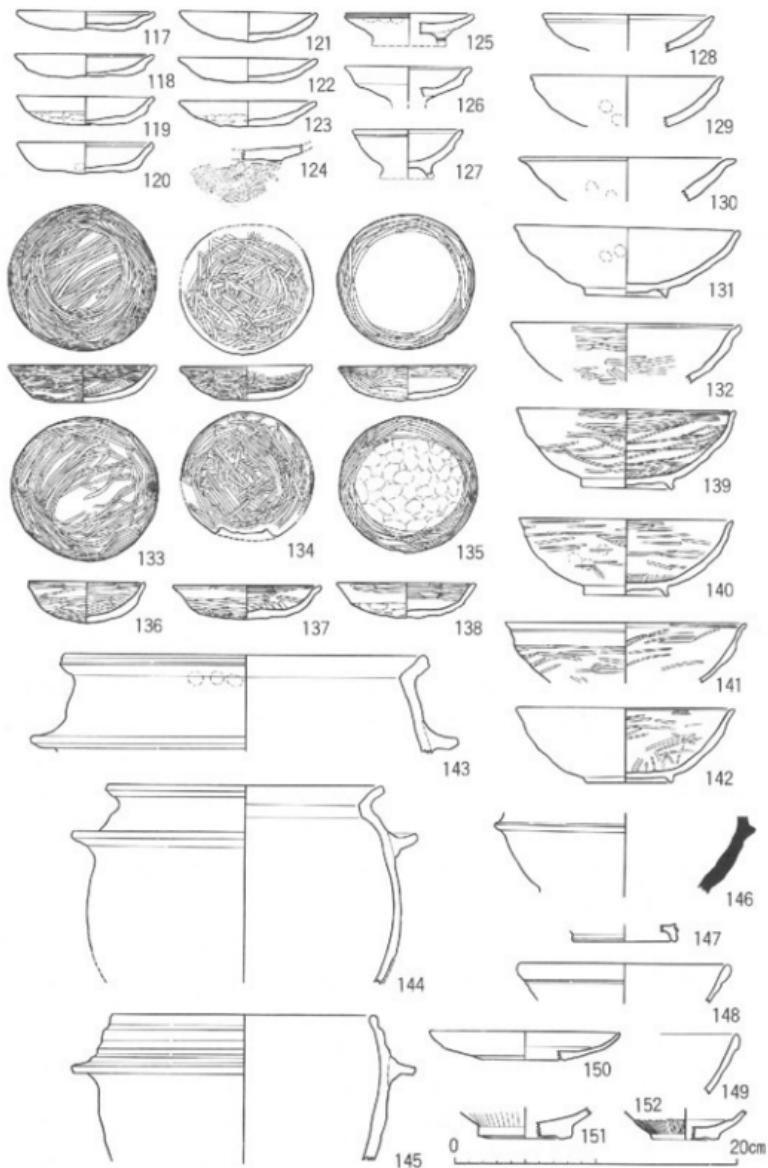
瓦器には椀がある。椀は2点あるが、(116)は口径15.3cm、器高5.7cm、器高指数37.2を測る。口縁部は立ち上がって外反し、口縁部は内面で面をもつ。高台は断面四角形を呈するが、薄手に作られている。口縁部は内外面とも横なで調整の上から横方向のヘラミガキが付加されている。体部は内外面とも横および斜方向のヘラミガキが施されている。見込みは斜格子のヘラミガキが施されている。この他、見込みに太くて、密に施された平行状のヘラミガキの認められるものもある。

2. 包含層出土遺物 (挿図16・117~152 図版14・15)

土師器、黒色土器、瓦器、須恵器、灰釉陶器、白磁がある。

土師器には皿、杯、小型椀、羽釜がある。皿には口径10cm前後の皿Aと13cm~15cm程度の皿Bがある。皿Aの中には台部のつくもの(125)(126)も認められる。口縁部は「て」の字口縁のもの(117)、外反して内面に沈線のめぐるもの(118)、外反して大きく開き、端部が丸くおさまるもの(119)、外傾して内面に沈線のめぐるもの(120)、底部から丸みをもって口縁部にいたり、端部が丸くおさまるもの(121)~(123)、底部に回転糸切り痕をもつもの(124)がある。

(125)は口縁端部外面に沈線がめぐる。皿B(128)は口縁部がほぼストレートに開いて、端部は丸くおさまる。杯には口縁部が外反して端部が丸くおさまるもの(129)、口縁部が大きく外反し



挿図16 包含層出土遺物

て、上端に面をなし、端部が丸くおさまるもの(130)、口縁部内面に沈線のめぐるものがある。小型椀(127)は1点だけ出土しているが、口径7.75cm、残存器高3.35cmを測る。器高指数はおそらく44.5程度で比較的深めの椀である。羽釜は口縁部が内傾した後、屈曲して外反するもの(143)、内傾した後、なだらかに外反するもの(144)、内傾して端部が丸くおさまるもの(145)、外反した口縁部の端部が丸く肥厚するものがある。

黒色土器には椀がある。A類とB類があるがA類が圧倒的に多い。(131)はA類であるが、口縁部はほぼストレートにのびて端部が丸くおさまる。(132)はB類であるが口縁部は外反して内面に沈線がめぐる。口縁部の形態はA類、B類にかかわらず、後者が圧倒的に多い。黒色土器は全体的に残りが悪く、調整のわかるものは少ない。

瓦器には皿と椀がある。皿には口縁部がストレートにのびるものと外反するものがある。口縁部は横なで調整後、横方向のヘラミガキが施されているが、外面ともに密に施されているもの(133)(134)、内外面両方だがそれはほど密でないもの(136)～(138)、外面だけに施されているものがある。外底面には平行線状のヘラミガキが施されているものが多いが、不規則な方向に施されているもの、ヘラミガキの全く施されていないものも認められる。見込みのヘラミガキには平行線状のもの、不規則な方向のもの、斜格子のものがある。椀は口径15.1cm～17.0cm、器高5.4cm～5.7cm、器高指数35.2～37.2を測る。口縁部は外反するものが多い。

口縁部は内面上端に面をもつものともないものがあるが、端部は丸くおさまるものが圧倒的に多い。ただ1点、第7層から口縁部内面に沈線のめぐるものが出土地している。調整は口縁部は内外面とも横なでが施されているが、中には上から横方向のヘラミガキが付加されるものもある。体部は外面とも横もしくは斜方向のヘラミガキが施されているが、細筋で粗く、空白部が目立つ。見込みのヘラミガキは平行状のもの、斜格子のもの、ジグザグ状のもの、不規則な方向に施されるものがある。

須恵器には鉢がある。(146)の形態の他に束播系の鉢が1点だけ認められる。

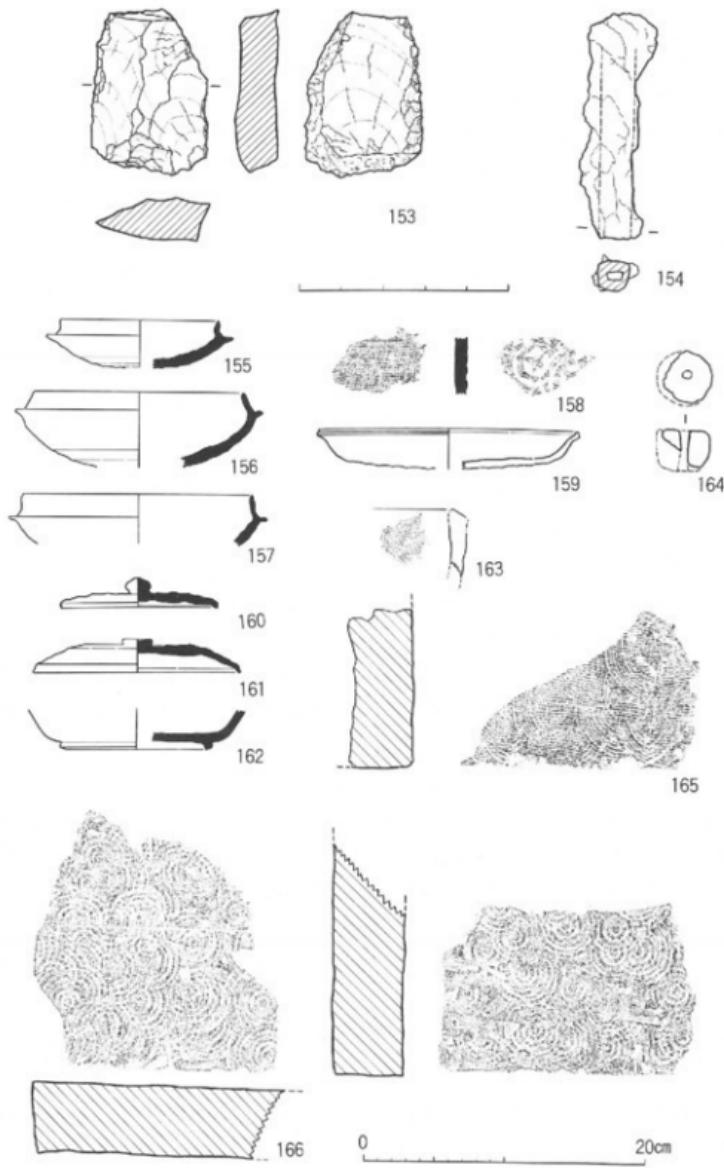
灰釉陶器は1点だけであるが、高台部片が認められる。

白磁には椀と皿がある。椀(148)(149)は口縁部が薄い玉縁状を呈し、器壁は薄い。皿(150)は口径は13.1cmを測り、口縁端部が丸くおさまる。この他、底部の破片も出土している。

3. その他の遺物（挿図17・153～166 図版17）

石器遺物、鉄製品、須恵器、土師器、製塙土器、土錘、埴輪、埠、瓦がある。

石器遺物にはサヌカイト製の打製品として、直刃削器、石核、剥片、原石がある。この他、緑色片岩製の石斧、和泉砂岩製のハンマーがある。直刃削器（153）は原面打面の打瘤の発達しない剥片を素材にして左縁に平形深形直線形裏面細部調整と左縁中央に平形深形直線形表面細



挿図17 その他の遺物

部調整で刃部をつくりだしている。先端部は表面からの折り面である。長さ39.5mm、27.3mm、厚さ9.9mmを測る。石核は6点ある。そのうち、剥片素材のものは3点である。剥片は59点ある。素材の形態をみると横形剥片20点、剥片23点、石刃状剥片1点、不明15点がある。打面は欠失したものが多い。なお、石刃状剥片の1点は垂直割れをうけている。原石は1点ある。大きさは97.2×90.1×57.1(mm)を測る。石斧は破片の厚みと磨面の状況からみて、太形蛤刃石斧とおもわれる。ハンマーは卵形を呈し、大きさは112.2×65.3×86.5(mm)を測る。片面に敲打痕が、反対側の面は敲打のために欠失している。また、全体に焼成をうけ赤変している。

鉄製品には釘がある。残存長5.4cm、幅0.75cmを測り断面四角形を呈す。

須恵器には古墳時代～奈良時代にかけての蓋杯と甕がある。古墳時代の杯である(155)は口径11.1cmを測る小さめのものである。底部外面にはおそらく「×」印と思われるヘラ記号が認められる。陶邑II型式1段階に比定できる。(156)は口径14.7cm、(157)は口径16.1cmを測り、かなり大型化してきた杯である。陶邑II型式2～3段階に比定できる。この他、器形が矮小化して、たちあがりが極めて短くなる陶邑II型式6段階のものも認められる。なお、この時期のものと思われる甕の破片(158)には内面に「十」字のタタキ目文の認められるものがある。奈良時代のものである蓋(160)は口径11.0cmを測るもので、天井部は偏平で、擬宝珠様のつまみがつく。(161)は口径14.6cmを測り、ふくらみをもつ天井部に偏平なつまみをもつ。杯(162)は断面四角形の高台がつく。

土師器には飛鳥時代の羽釜、奈良時代の皿がある。羽釜は生駒西麓の胎土をもつもので1点出土している。皿は口径18.1cmを測るもので、口縁部は外反して開き、口縁端部は内側に丸く肥厚する。口縁部は内外面とも横なで調整が施されている。底部内面はなで調整だけで暗文は認められない。外面はヘラ削りが施されている。

製塙土器は3点出土している。器壁の厚さは9mmを測り、口縁端部が丸くおまるもの、器壁の厚さは1.3mmを測り、口縁部内面に段をもつもの、口縁部はほぼ直立し、口縁端部は外傾する面をもつもの(163)がある。(163)は内面に布目痕が認められる。布目痕は1cmあたり12本の単位で認められる。胎土中にはスサ痕がある。

土鍤(164)は1点出土している。直径は約4cm、残存厚2.6cmを測る。ほぼ中央に直径7mmの円孔が焼成前に穿たれている。

埴輪は1点出土している。細片の上、全体に磨滅が著しいため、調整は観察できない。タガの状況も幅が約1.3cmあるとわかる以外、観察できない。

埴は同心円のタタキ目文をもつ須恵器製のものである。タタキ目文の原体は2種類認められる。(165)の原体は直径約8cmを測り、約13重の同心円が認められる。タタキ目の下には布目痕があるが、布目痕は1cmあたり13本の単位で認められる。焼成は甘く、軟質である。(166)

の原体は直径約5.8cmを測り、約8重の同心円が認められる。片側はタタキ目の下に布目痕が認められるが、もう一方はなで消したのか、布目痕が認められない。タタキ目の下の布目痕は1cmあたり6本の単位で認められる。端面は削り調整が施されている。なお、布目痕のある面には最後に約1mm幅の区画用の沈線が1本引かれている。あと1点は残存状態が悪く、十分観察できないが、タタキの原体は(166)のものと類似する。

(栗田)

4.まとめ

今回の調査で、古代末～中世にかけての遺構が多く検出されたが、残念なことに遺構の性格のわかるものはほとんどなかった。そんな中にあってピット1、ピット3、ピット4に見られる土器皿Aの集積は建物の地鎮を暗示させ、調査地周辺での集落の存在を証拠たてる重要な発見になった。

出土遺物の器種構成から見るとき、東播系の須恵器の鉢が包含層から1点しか出土していないことは重要である。遺構の所属時期が東播系の須恵器の流通が活発になる以前であることを示唆している。

瓦器椀はほとんど和泉型で、他に楠葉型のものが2点出土しているが、1%にも満たない。また、炭素の吸着の悪いものも多く出土している。瓦器椀は器高指数40の深い椀形を呈するものから、器高指数31程度の浅いものまで認められる。その中でも器高指数36～39程度で、深い椀形をしめしながらもヘラミガキの粗略化が始まった時期のものが最も多く出土している。それらの大半は外面のヘラケズリや横などによって表面を平滑にしようと努力せず、指頭圧痕による凹凸を残したままにしている。ヘラミガキも外面から粗略化が始まり、ヘラミガキは高台付近までおよばず、体部の2/3程度で終わっている。また、施された部分であっても空白部の目立つものが多く認められるようになる。それでも内面はまだ、比較的空白部も目立つことなく密に施されている。ただし、ヘラミガキに方向性は認められず不規則な方向に施されたものが多くみられる。この他、溝1と土壌14-4から新しい時期の瓦器椀が出土している。とりわけ、土壌14-4から出土したものは断面三角形の高台が、0.25cmの高さしかなく退化がはじまっている。どちらも外面にはヘラミガキは認められず、器壁は薄い。なお、土壌14-4から出土したものは見込みに螺旋状のヘラミガキをもつ唯一の例である。

瓦器皿のヘラミガキは口縁部は横向に施され、底部外面は平行状に、内面は平行状もしくは不規則な方向に施されるものが多い。そして、徐々にヘラミガキの範囲が少なくなり、外底面にヘラミガキが施されなくなるものまで見られるようになる。

黒色土器はA類の椀が多く出土している。B類も出土しているが、量は少ない。黑色土器生

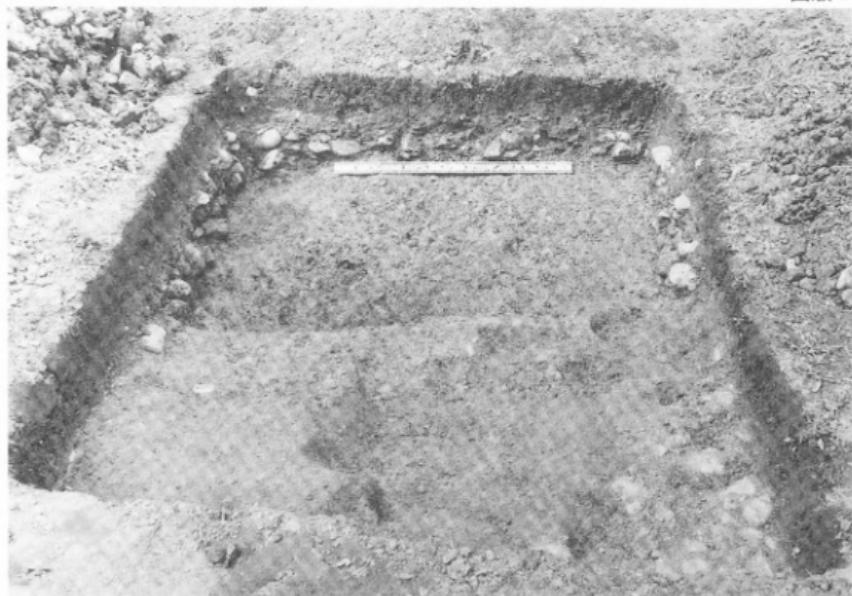
産の終わり方については南河内・和泉地域での在り方が、畿内中枢地域と同様でないことはすでに指摘されているが、今回の調査からもそのことが裏付けられている。すなわち、黒色土器A類→黒色土器B類→瓦器へと単純に移行せず、黒色土器が瓦器生産と並行して残存している可能性が強い。とりわけ、当地域において黒色土器のA類がB類よりも出土比率が多いという状況は必ずしも黒色土器B類を経て瓦器へ移行していないことを証拠づけている。ただし、出土した黒色土器の大半に口縁部内面に沈線のめぐるものが認められるという事実から、ただちに当地域のA類から瓦器に移行したということも断言できない。

土師器はピット1、ピット3、ピット4での皿Aの在り方が興味深い。ピット1、ピット3各々から出土した皿Aはそれらの胎土、調整の状況から一人の工人が一時期に作ったものであることがわかる。ピット4の皿Aの場合は同様の事実から複数の工人が一時期に作ったことがわかる。そしてそれらの出土状況を見ると、さらに興味深いことがある。ピット1、ピット2の場合、その出土状況はまさしく埋納と言う表現がふさわしい。ところが、ピット4の場合、同じ埋納と言う意識があったにしてもその在り方に、若干、差異がある。すなわち、無造作に入れた皿の間には炭がぎっしりと詰められていた。これらの間にある製作、埋納の差異にどういう意識の違いがあるのかは興味深いところである。この他、特殊な製作技法で作られた土師器として回転台土師器が7点認められる。これらの大半が皿Aで、1点だけ皿Bが認められる。これらはすべて糸切りで、ヘラ切りのものは認められない。

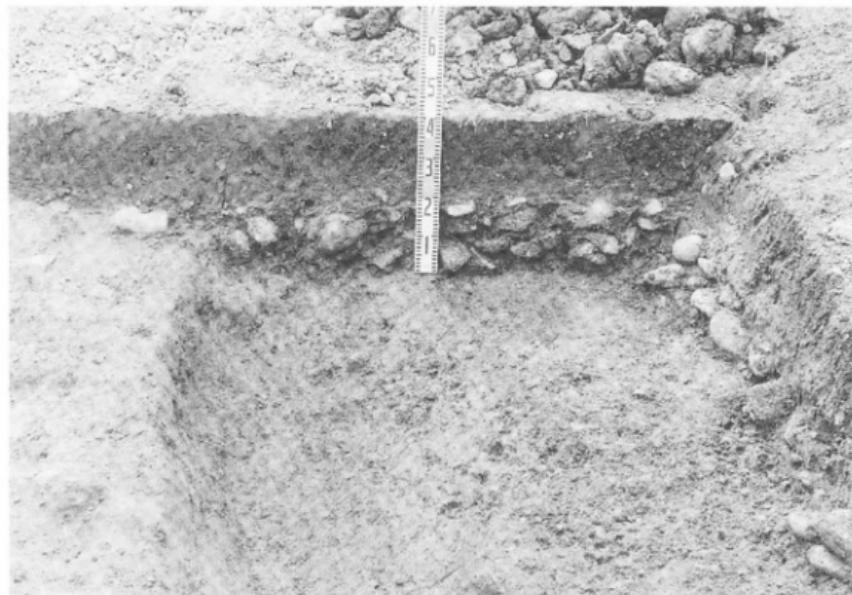
この他、造構の所属時期より古い時期の出土遺物の中には興味深いものが多く出土している。例えば、6世紀末～7世紀初頭の須恵器の甕の内面に「十」字のタタキ目文が認められるものがある。陶邑TG68号窯で確認されたものに類似する。このタイプと同じタタキ目文は富田林市内では中野遺跡でも出土している。これら再遺跡から出土した須恵器の一部はTG68号窯を供給元にしていると考えたい。この他、同心円タタキ目をもつ須恵器製の壇の出土は錦織紐井廃寺の寺域の問題を考えさせる資料となる。また、製塩土器の中には生産地の違うものが出土している。内面に布目痕の認められる、かつて「六連式土器」と呼ばれた北部九州に多く出土する製塩土器の存在と、紀淡海峡産の製塩土器の存在は富田林市内ですでに出土している甲田南遺跡や中野遺跡と同じ搬入状況を示し、消費地での在り方、すなわち、塩の搬入が单一地域だけに限られていないという状況を示している。このことは、塩の消費に対する多様性を考えさせるとともに律令制下の地域国との絆をこえた流通の在り方というものを考えさせる資料となる。

(今西・栗田)

図 版



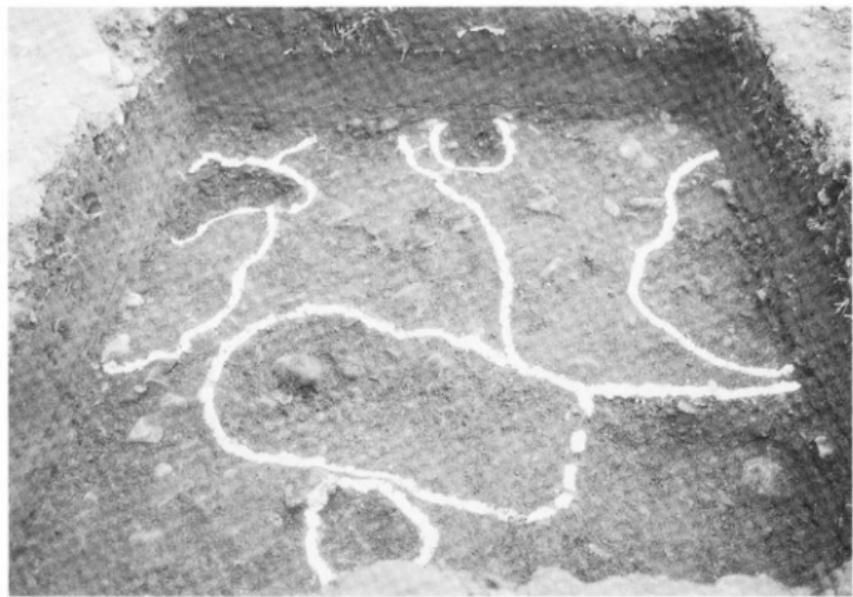
K D 9 2 - 1 調査区全景 南から



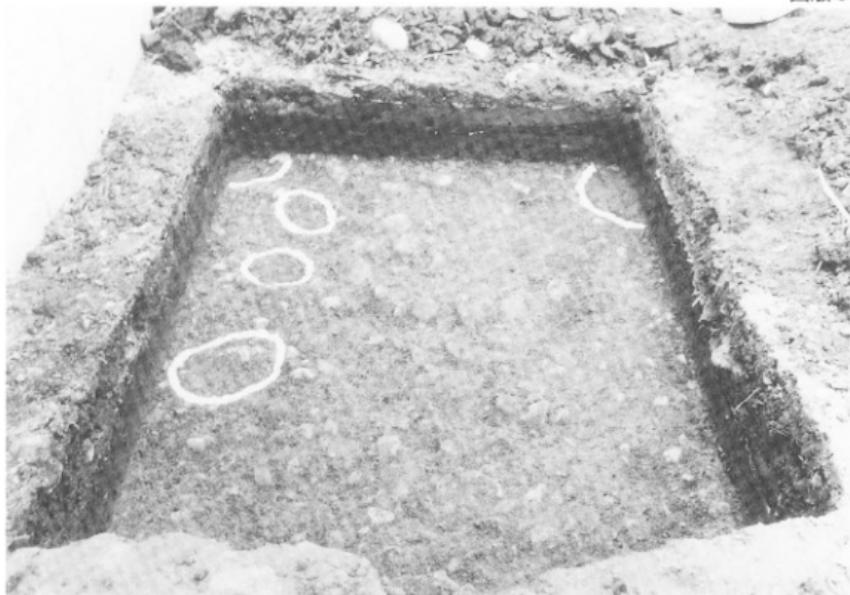
K D 9 2 - 1 溝1西断面 東から



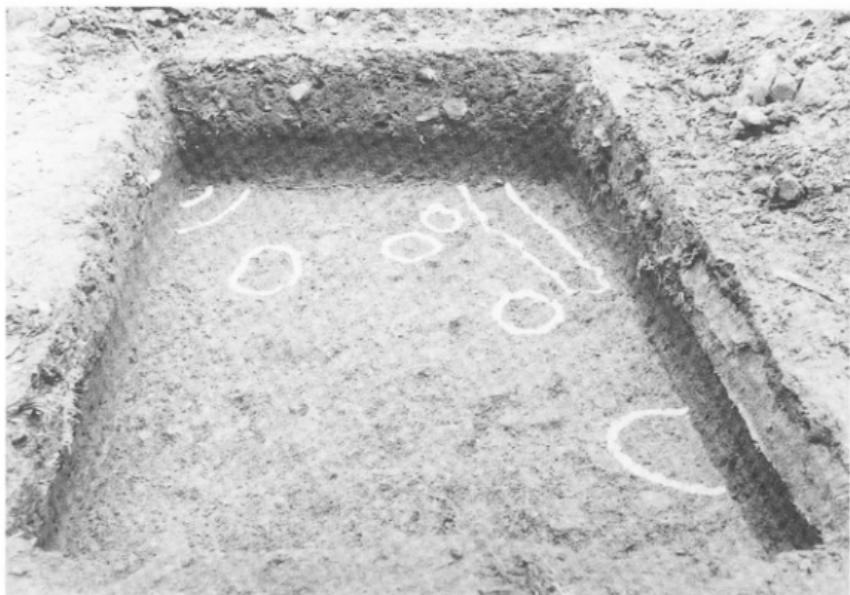
K D 9 2 - 2 調査区全景 北東から



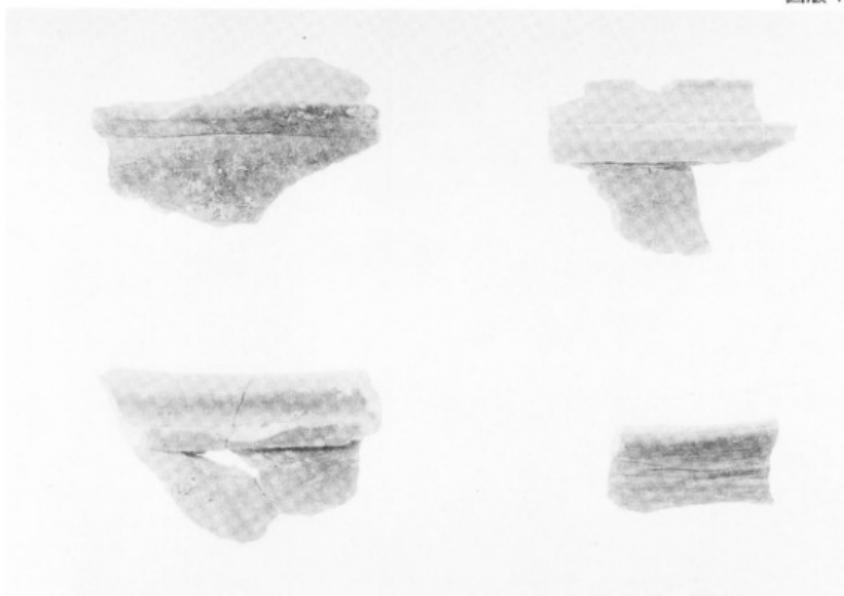
K D 9 2 - 3 調査区全景 北から



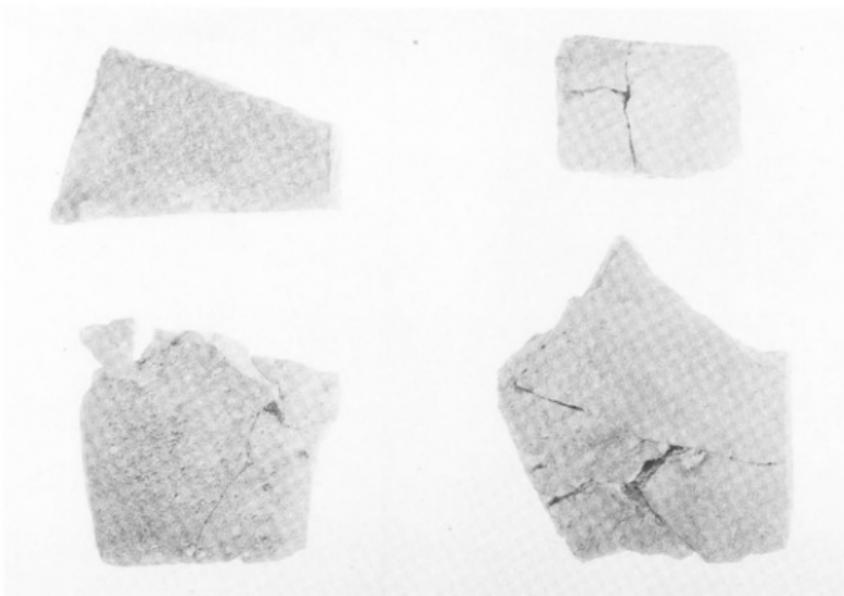
K D 92-4 調査区全景 北から



K D 92-5 調査区全景 北から



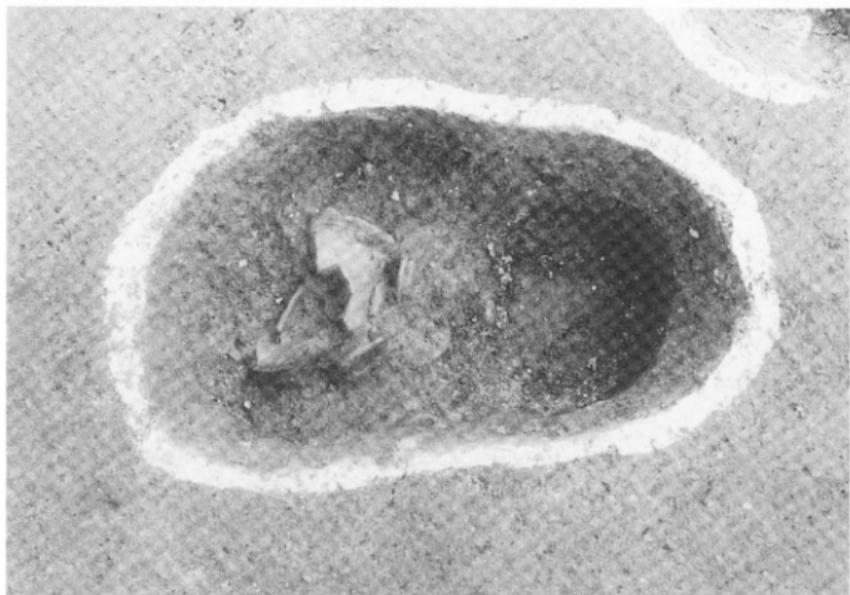
KD92-2 土壤1出土土器



KD92-2 土壤1出土瓦



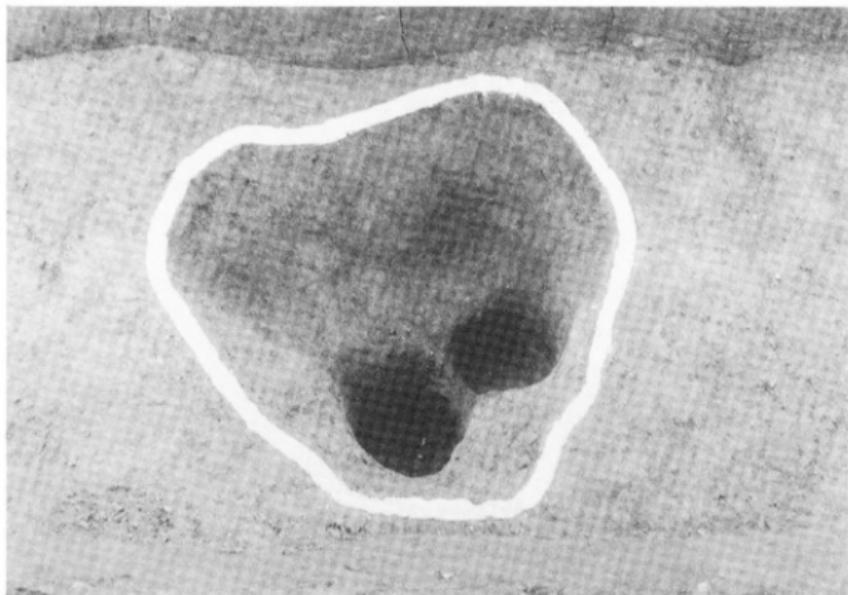
K D S 9 2 - 1 第1トレンチ全景 南から



K D S 9 2 - 1 第1トレンチ ピット9遺物出土状況 北から



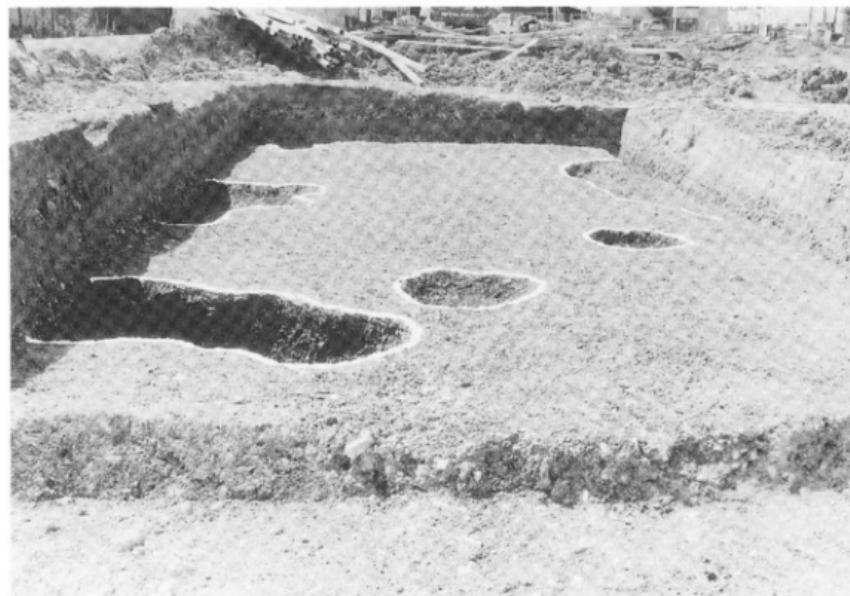
K D S 9 2 - 1 住居址 1 全景 南から



K D S 9 2 - 1 住居址 1 内柱穴 1 東から



K D S 9 2 - 1 第2トレンチ東半部全景 東から



K D S 9 2 - 1 第2トレンチ西半部全景 東から



23



24



20

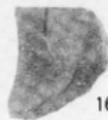
K D S 9 2 - 1 土壌 1 出土土器



6



15



16

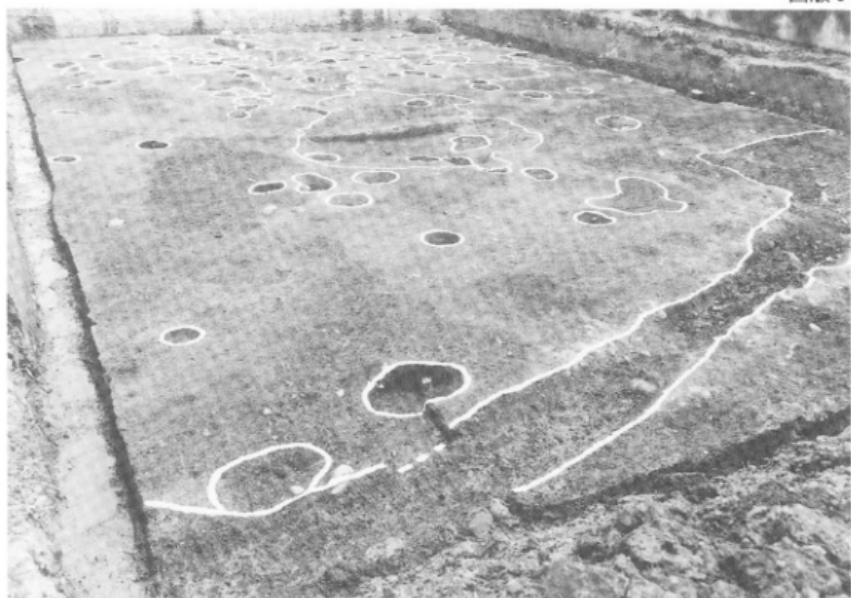


17



18

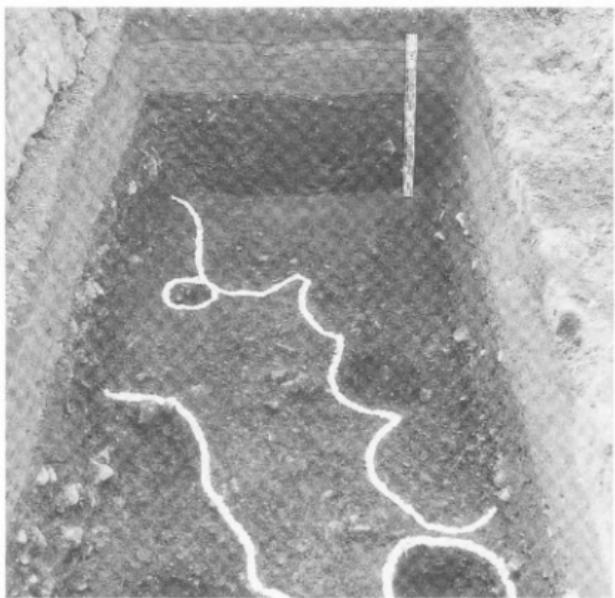
K D S 9 2 - 1 住居址 1・包含層出土遺物



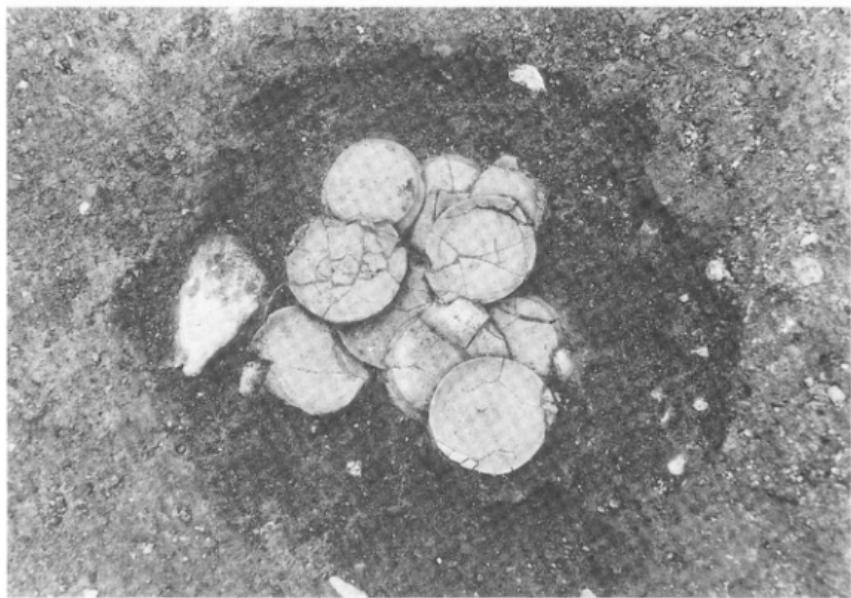
NK 92 調査区全景 南西から



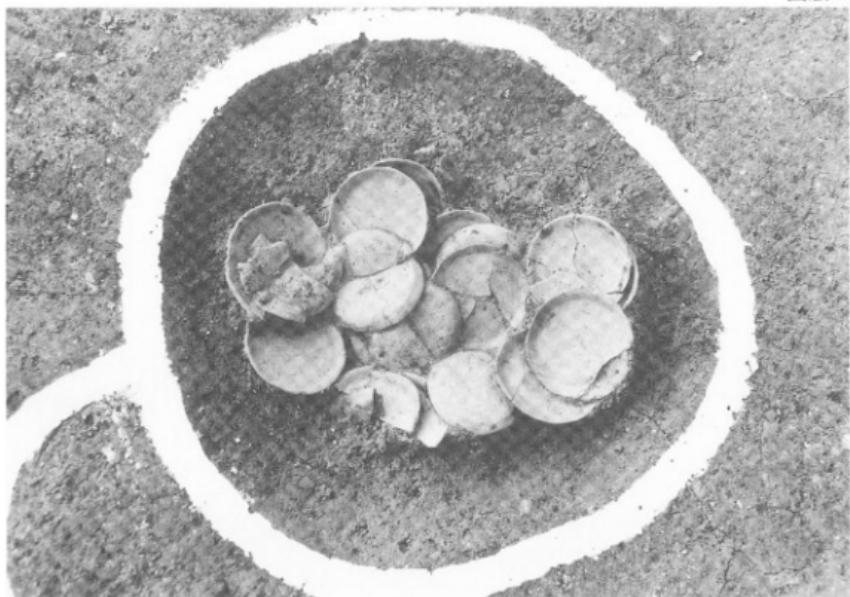
NK 92 調査区全景 北東から



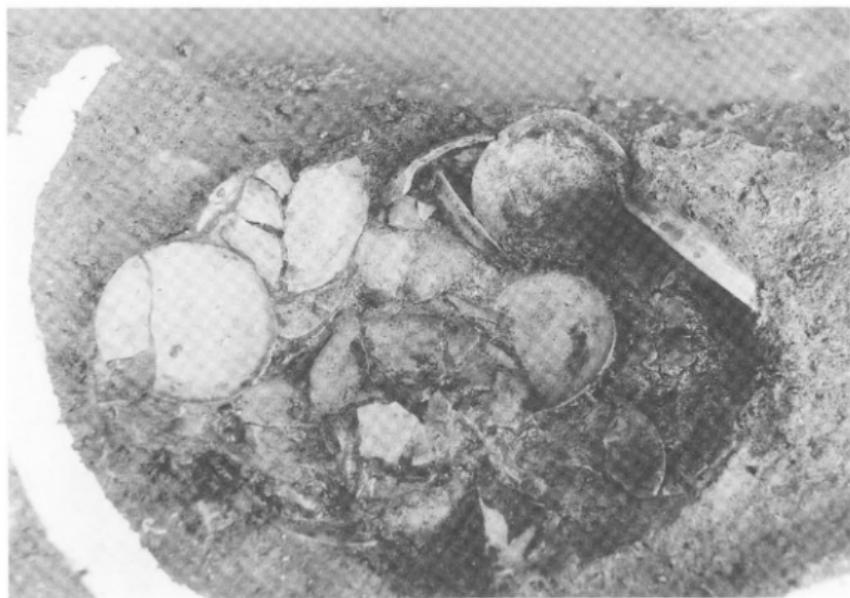
NK92 トレンチ全景 東から



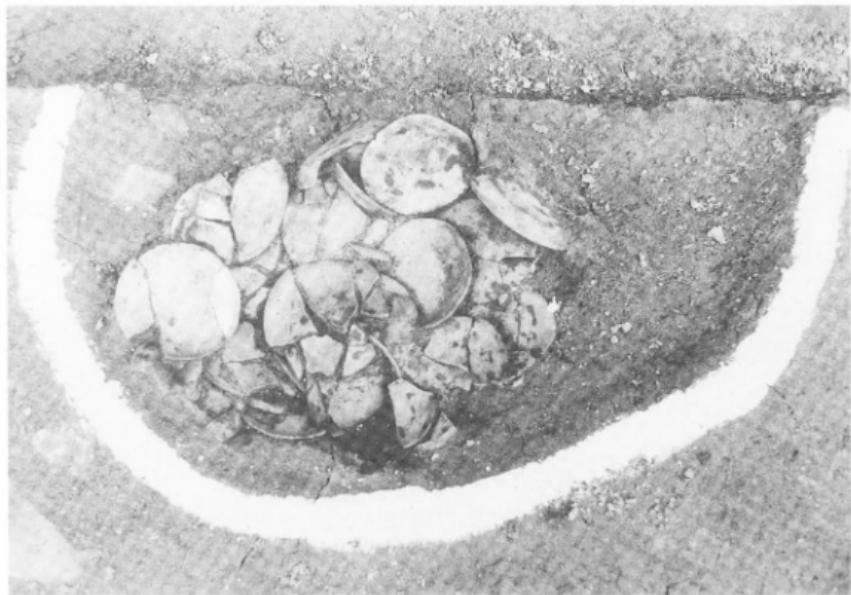
NK92 ピット1 遺物出土状況 東から



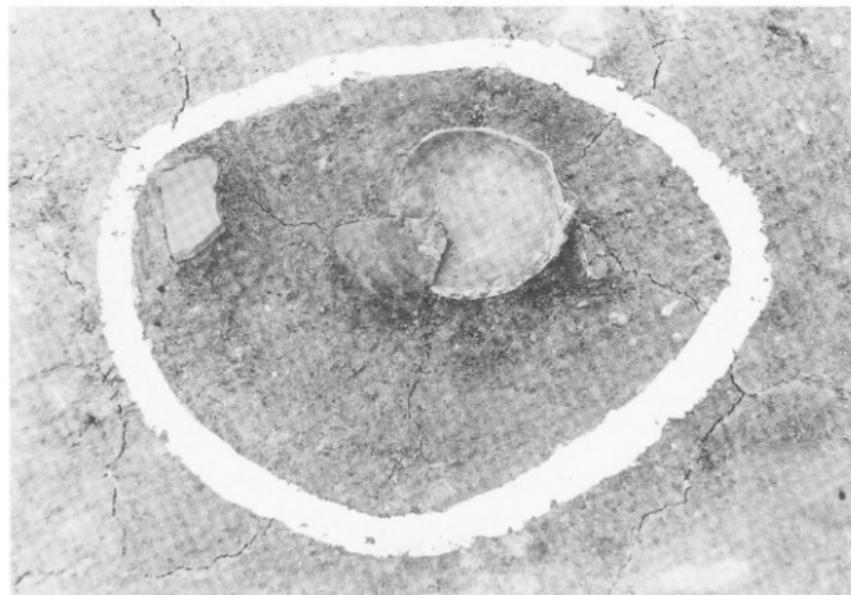
NK92 ピット3遺物出土状況 東から



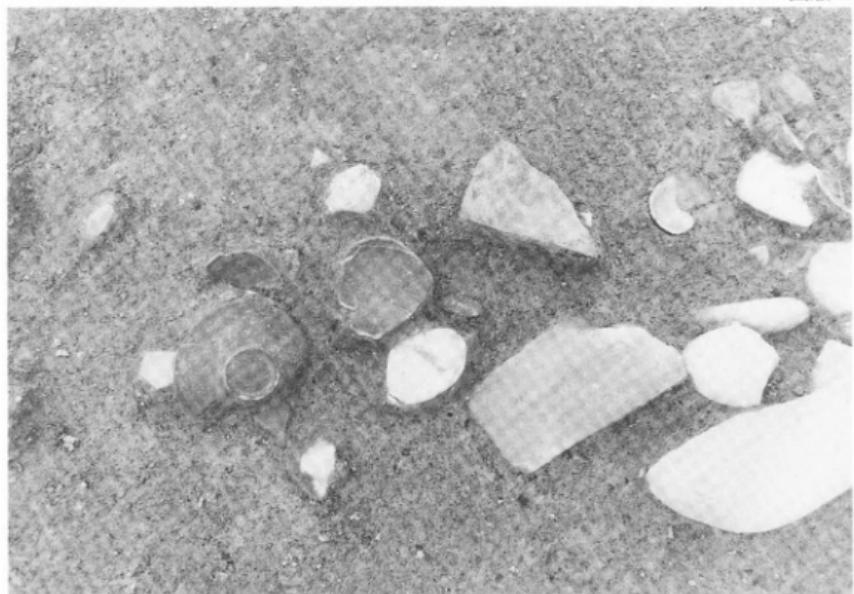
NK92 ピット4遺物出土状況 西から



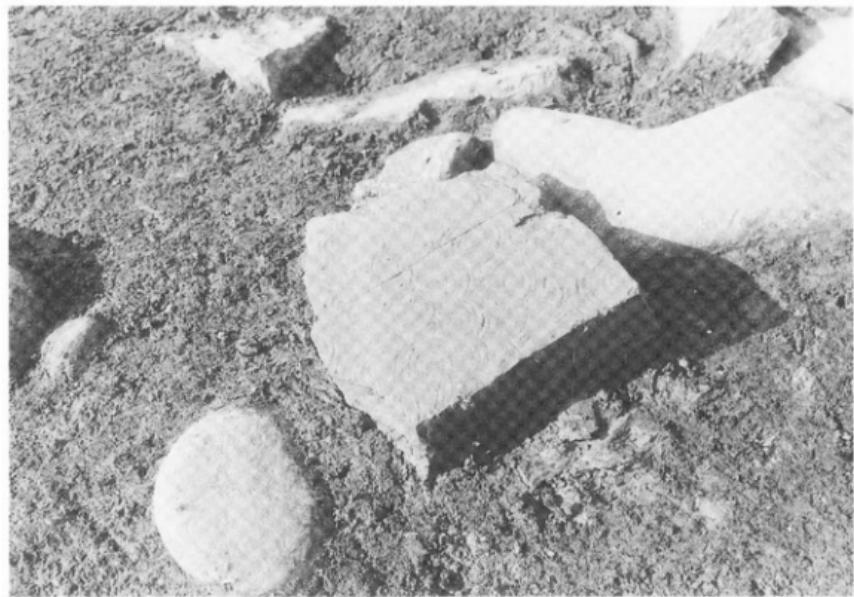
NK92 ピット4遺物出土状況 西から



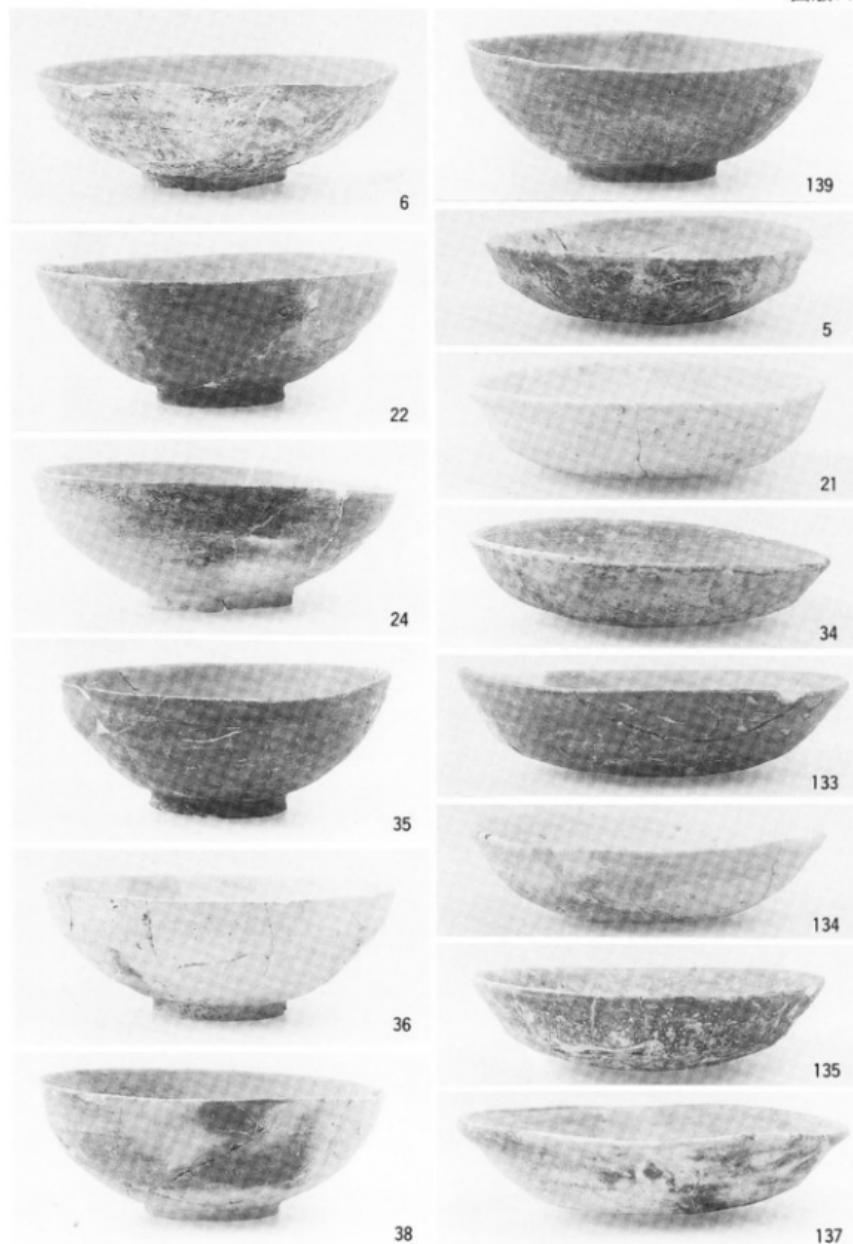
NK92 ピット2遺物出土状況 東から



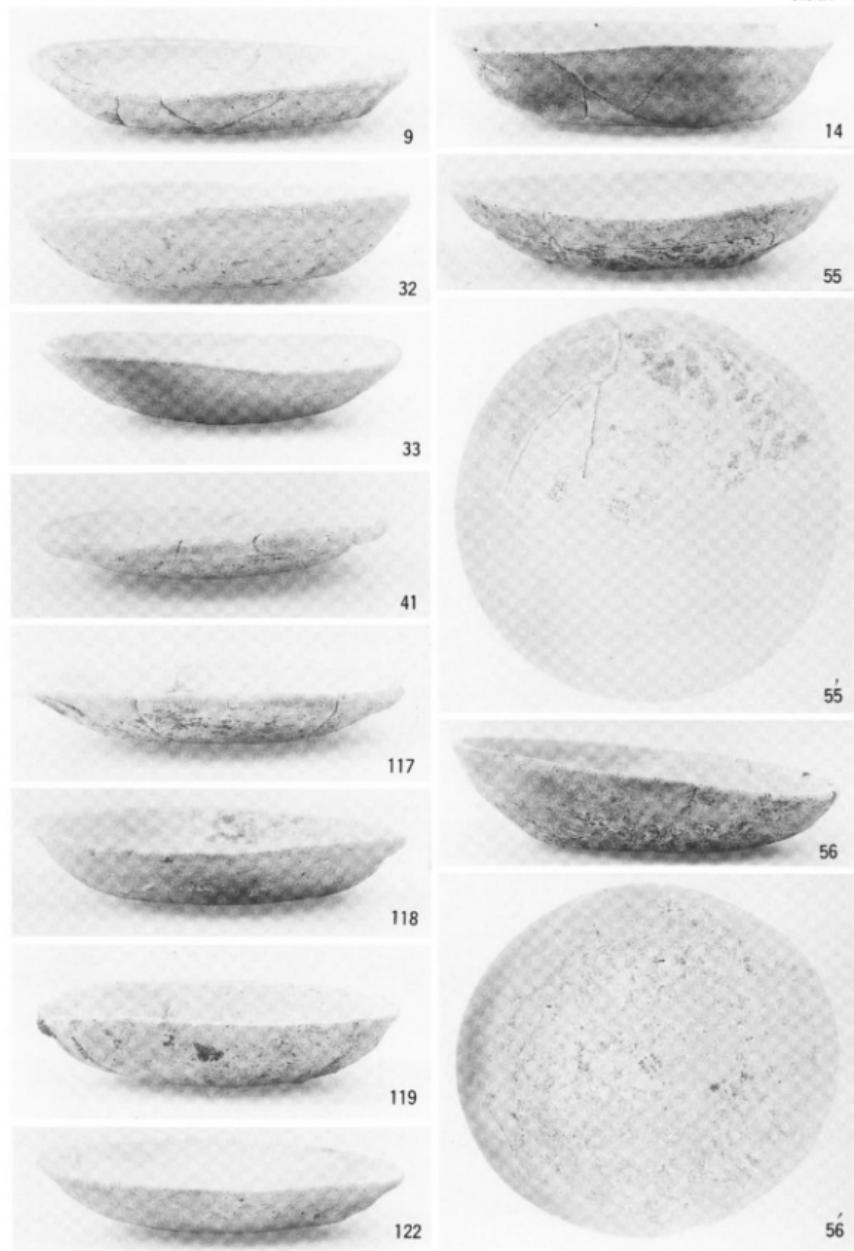
N K 9 2 包含層遺物出土状況 西から



N K 9 2 塗出土状況 東から



N K 9 2 出土遺物（瓦器碗・皿）



N K 9 2 出土遺物（土師器皿 A・B）



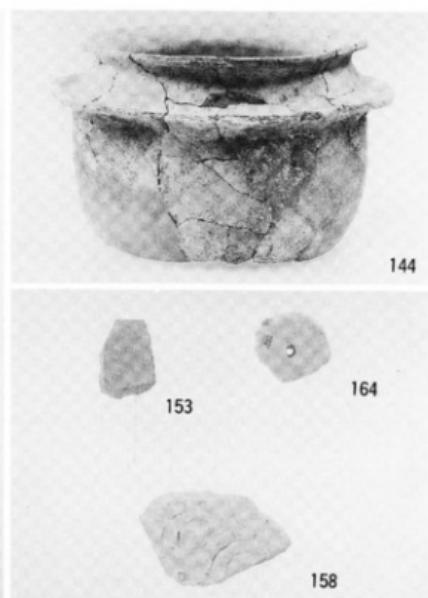
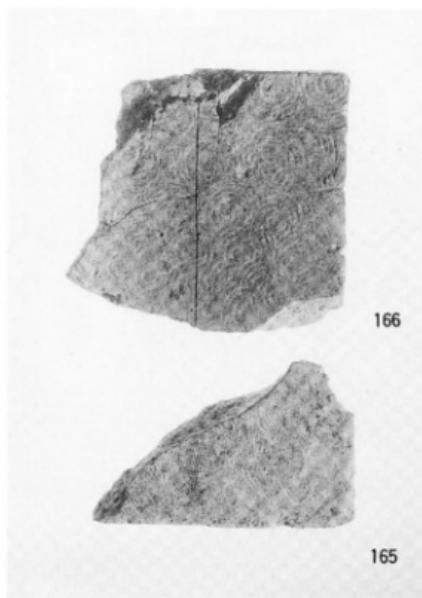
NK92 ピット1出土土器（土師器皿A）



NK92 ピット3出土土器（土師器皿A）



NK92 ピット4出土土器（土師器皿A）



NK92 出土遺物（羽釜・直刃削器・土錘・須恵器壺・埠）

富田林市埋蔵文化財調査報告22

発行年月日 1993年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

1993.300

